

# 学内広報

for communication across today



特集： ■ 東京大学の行動シナリオ FOREST2015  
～平成 23 年度までの総括と平成 24 年度以降の展望～

■ 冠研究機構の誕生

IPMU が 4 月より Kavli IPMU となり前進！

2012.5.25

No. 1425

# 東京大学の行動シナリオ FOREST2015

## ～ 平成23年度までの総括と平成24年度以降の展望 ～

平成22年3月に「行動シナリオ」を策定してから、2年が経ちました。初年度には、学内の各部署を訪問して、「行動シナリオ」の説明を行いました。多くの教職員の皆さんと活発な意見交換ができたことは大きな収穫でした。まずは分散的であっても幅広い項目にわたって取組を進め、全体としてほぼ双葉が出揃った状態となり、中には短期間のうちに若木として育ててきた項目もありました。

平成23年3月には、東日本大震災、それに伴う大津波と福島原子力発電所の事故という凄まじい惨禍に遭遇しました。これに対する東京大学のスタンスとして、5月に「生きる。ともに」というメッセージを発し、多くの学生や教職員のボランティア活動への参加、専門知識を生かした復興支援プロジェクト等を通じて、被災地や被災された方々への支援を行ってきました。震災以後、改めて社会からの大学に対する期待・要請の重みを感じました。

一方で、平成23年度は教育改革についての一つの画期となりました。入学時期の在り方を検討するための懇談会を設置して幅広い検討を行い、本年3月には、秋季入学への移行を提言する報告がまとめられました。秋季入学への移行をめぐることは、学内で活発な議論が交わされたのみならず、社会の広範な関心を引き起こしました。これも日本再生に向けて社会から大学に寄せられる期待の表れとして受け止めています。

この他、全体として、社会連携、国際化の推進など各重点テーマに基づく取組が着実に進められてきていると思います。若木が地にしっかりと根を張りつつ、新たな若木が育ち、東京大学という森が動いていることを実感しています。

平成24年度は、私の6年間の任期の折り返し点です。残り3年間の任期中に「行動シナリオ」の内容をできるだけ実現し、教育研究の水準向上の成果を示していきたいと思えます。豊かな構想力を備えた「世界を担う知の拠点」として、明日の日本を支えるという本学の使命をしっかりと果たしていけるよう、様々な取組を加速していく決意です。学術研究の高い水準をさらに向上させることはもちろん、入学時期の在り方に関する検討を一層深めつつ、入学試験制度の改善、進学振分け制度の改革、教育の質の向上などの教育改革を総合的に推進し、「よりグローバルに、よりタフに」学生を育てていく取組を進めていきたいと考えています。また、東日本大震災に関する救援・復興支援活動の推進について、その重要性を踏まえ、新たに10番目の重点テーマとして位置づけ、継続的に取組んでいく姿勢を明らかにしました。

国の財政状況がますます厳しさを増すなど、「行動シナリオ」を実現する環境は十分に整っているとは言えませんが、受け身の姿勢であっては状況を打開することはできません。引き続き、東京大学のこれからの活力の基盤を作る「行動シナリオ」の内容を確実に実現しながら、その改革の取組と成果を広く学外に発信し、社会システムの在り方の見直しにもつなげていく粘り強い努力が必要になっています。

東京大学の教職員の皆さんには、今後とも、日々の教育研究の一層の充実とあわせて、「行動シナリオ」の各項目の実現への積極的な協力をお願いします。

総長 濱田 純一



次のページからは重点テーマ別の総括と展望です





## 1. 学術の多様性の確保と卓越性の追求

学術の多様性の確保と卓越性の追求に向けた支援体制の充実のため、国際高等研究所（TODIAS）等への支援を行うとともに、「博士課程教育リーディング大学院プログラム」等を推進した。また、東京大学ホームページに「Todai Research」を設け、積極的に学術情報を発信した。さらに、リサーチアドミニストレーター（URA）のスキル標準の策定を検討し、URAの配置試行を開始するとともに、学術研究懇談会（RU11）において学術研究支援の在り方に係る提言書を取りまとめるべく検討を行った。一方で、国の財政状況は一層厳しく、間接経費が削減されるなど研究推進のための財政確保が難しくなっている。

平成24年度以降は、平成23年度に行われた世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の中間評価でS評価を受けるとともに、世界の有力研究機関を支援している米カプリ財団から寄附を受けた数物連携宇宙研究機構（IPMU）の常設機関化に向けた体制整備等の検討を行うとともに、TODIASについて新たな研究機構の設置等を検討する。また、URAのスキル標準の素案を取りまとめるなど研究支援体制の充実を図るとともに、RU11で提言書の取りまとめを行うなど研究大学間の連携を更に強化する。

### 【平成24年度以降の主な取組】

- ▶ 国際高等研究所の強化（新たな研究機構等の設置、Kavli IPMUの常設機関化及び教員のテニュア化の検討）
- ▶ 学術研究体制の充実を図るため、研究重点型大学との連携を一層強化し、政府に研究財源における規制緩和等を要請
- ▶ 研究支援体制の強化策の検討・実施（優秀な学生を惹きつけ、高度な教育と研究を融合させ、世界で活躍する優れた研究者を輩出できる環境整備の強化、URAの職種・職域の確立に向けた制度等の検討など）
- ▶ 「特例教授ポスト」の運用及び採用可能数の柔軟な運用による若手研究者のポスト確保
- ▶ 本郷キャンパスの新しい知の拠点となる新図書館構想の具体化
- ▶ 東京大学の研究ビジビリティを高めるための学術情報発信の充実（「Todai Research」のコンテンツ充実・改善、アウトリーチ活動の促進・支援、総合研究博物館の研究成果の展示・公開施設の更なる拡充など）

（主担当：理事 松本 洋一郎）

## 2. グローバル・キャンパスの形成

グローバル・キャンパスの形成にあたり、海外留学促進に向け、全学学生交流協定を増やすとともに、駒場キャンパスで留学フェアを新たに開催するなど、留学への動機付け等も行った。優秀な留学生の獲得に向け、英語で学位が取れるコースの拡充（平成23年度現在31コースを開講）や、国際短期プログラムを実施（2プログラム）した。併せて、既存のフェローシップの改正や Programs in English at Komaba（PEAK）生向けスカラシップの設立など、経済支援の充実を図った。また、海外での情報発信強化のためインド事務所を開設したほか、優れた学術研究成果の発信と主要大学等との研究交流・学生交流の進展を目的として、フランスにて東大フォーラムを開催した。

平成24年度以降、留学生受入れに関しては、PEAK生の受入れを開始することもあり、環境整備を引き続き進める。北京・インド事務所等の海外拠点において留学フェア等を実施するほか、HP等での情報発信を強化し、優秀な留学生の獲得を目指す。学生派遣に関しては、世界展開力強化事業における学生交流を支援するほか、協定校を増やすとともに、送り出しに向けた様々なメニューを検討し、多くの学生が国際的な体験を受けられるよう、部局と連携しながら体制整備を行う。

### 【平成24年度以降の主な取組】

- ▶ 英語で学位の取得できるコース（学部初コース（PEAK）を含む）の拡充
- ▶ 海外拠点の一層の活用を通じ、優秀な留学生の獲得を促進
- ▶ 留学生・外国人研究者の受け入れのための体制整備（留学生等のニーズに対応する多様な日本語教育コースの提供、日本人学生を日本語学習支援者として育成、事務組織の国際化対応など）
- ▶ 海外留学（送り出し）を促進するためのプログラムの充実及び情報提供の強化
- ▶ 国際短期プログラム制度の積極的展開
- ▶ 国際的発信の強化（「Todai Research」の充実、東大フォーラムの開催）及び国際的連携の強化（IARU、APRU等の国際大学連合、Global University Summit等の国際会議、二国間学長会議等への参加）
- ▶ 各キャンパスのサポート強化並びにサービスの平準的向上

（主担当：理事 前田 正史）



### 3. 社会連携の展開と挑戦—「知の還元」から「知の共創」へ

社会連携を組織的に推進する事務組織として、平成 23 年 7 月に社会連携部を新設し、文京区等からの地域相談窓口となるとともに、コミュニケーションセンターの運営体制の見直し・活性化、「知の共創」の実現に向けた検討を行った。大学と社会との双方向的な連携を推進するため、「東京大学における社会連携に関する基本方針」を策定するとともに、社会連携及び国際交流拠点となる伊藤国際学術研究センターを設立した。そのほか、東大 EMP 等の実施や、「Todai Research」、公式アカウントによる SNS（Facebook 等）を活用したアウトリーチ活動を推進した。

一方、産学連携における「知の共創」を推進する取組として Proprius21・グローバル Proprius21 による部局横断型の共同研究の創出、(株)東京大学 TLO との緊密な連携のもと海外特許の戦略的な取得と技術移転活動の促進を進めた。また、(株)東京大学エッジキャピタルの投資先であるベンチャー企業が株式上場を果たすなど東京大学におけるベンチャー起業の活躍、支援の成果を外発信することができた。

平成 24 年度以降は、各既存事業を更に推進するとともに、ウェブ・SNS を活用した国内外の社会への発信強化、学内のイベント情報等を東京大学ホームページに集約した効果的な発信機能の強化、伊藤国際学術研究センター・カンファレンスなどによる社会連携・国際交流活動の強化促進等を通じて、社会との更なる連携強化を行う。また、産学連携協議会会員向けにシーズ提案会を開催するなど新たな共同研究の創出を図る。

#### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ 学内のイベント情報等を東大ウェブサイトを集約し、効果的に発信する機能の強化
- ▶ 伊藤国際学術研究センター・カンファレンス開催などによる、社会連携、国際交流の強化促進
- ▶ コミュニケーションセンターの運営の活性化と情報発信の強化
- ▶ 産学連携協議会の会員数の増加を図り、産学連携プラットフォームの裾野を拡大
- ▶ (株)東京大学 TLO との連携の下、研究成果の社会での実用化を一層推進
- ▶ 中長期的に大学発ベンチャー企業を継続的に創出できる体制構築、起業文化の醸成
- ▶ 国内外企業と、価値創造を目指したイノベーションの発現につながる共同研究の創出
- ▶ 東京大学公開講座や東大 EMP 等のプログラムの実施

(主担当：理事 松本 洋一郎)

### 4. 「タフな東大生」の育成

東大生を心身ともにタフで国際的に通用する人材に育成するため、全学的な教育課題の総点検を行った。その結果を全学で情報共有し、教育運営委員会及び教育企画室において、教育改革に関する検討を行い、部局横断型教育プログラムの拡充などの取組を進めた。また、将来的な入学時期の在り方について懇談会を設置し、学部段階の秋季入学への全面移行、ギャップタームの導入等について提言を取りまとめた。さらに、全学体育施設検討部会を設置し、整備が必要な体育施設を検討し、学生の充実した生活環境の推進に向けた基盤づくりを行った。

平成 24 年度以降は、俎上にある様々な教育課題について、優先順位を明確にして解決の方策を検討し、逐次実施していく。特に、教育の国際化の加速、教育の質の向上に向け、総合的な教育改革を推進する。入試や進学振分け、秋季入学などの重要課題についても、現状・課題を点検しながら、幅広い観点から検討を深めていく。その際、総合研究大学としての特性を踏まえ、先導的な学内の取組の全学展開を図っていくことを基本としつつ、様々なポリシーの明確化、短期留学の促進を含む国際化等に対応した統一化・標準化、国内外の有力研究大学との連携などを通じ、実効性のある改革を積極的に進めていく。さらに、学生支援については、きめ細かな対応及び学生相談体制の充実を一層進めつつ、厳しい財政事情を踏まえ、経済支援策の見直しなどにも留意して対応する。

#### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ 秋季入学の検討をはじめ、高度なグローバル人材の育成に向けた総合的な改革の推進
- ▶ 教育の国際化の推進（英語力の強化、海外体験・異文化体験等の機会の拡充など）
- ▶ 入試及び進学振分け制度の改善の方向の取りまとめ
- ▶ 社会貢献活動、就業体験活動など多様な体験活動の推進・実行
- ▶ 学生相談体制の充実・強化など多様な学生支援の一層の整備
- ▶ 女子学生を対象とした、学生宿舍の整備及び予約型奨学金の創設に向けた検討
- ▶ ヨコの統一化とタテの連続化に向けた取組（前期課程・後期課程の接続の改善について検討、成績評価や授業評価の在り方など教育の質の向上に係る検討、学生の学習状況を連続的に把握するシステムづくりの検討、教養教育の高度化、部局横断型の教育の推進など）
- ▶ 卓越した学生が、早期に学問研究の先端に触れ、高度な学習ができるよう、特別なプログラムの開発・充実について検討
- ▶ 教育の社会連携を推進し、若年学生と社会人等が共に学び交流機会を充実する方策の検討
- ▶ 学生の卒業後の進路の実態把握の強化

(主担当：理事 佐藤 慎一)



## 5. 教員の教育力の向上、活力の維持

教員の教育力向上に向けた企画立案の要として、ファカルティ・ディベロップメント（FD）の基本方針の在り方を検討するとともに、具体的な方策を実施する役割を担う大学総合教育研究センターに寄付部門を設置し、センターの機能強化を図った。また、教員評価制度の運用指針を踏まえた対応を引き続き実施するとともに、個々の教員の業績に関する情報公開を全学的に推進し、新任教員のためのファカルティ・ハンドブックの作成に着手するなど、教員の教育力向上に向けた体制の確立を図った。さらに、若手研究者のポスト確保などに向けた新たな人事制度につき、その枠組みの合意形成を行った。

平成 24 年度以降は、総合研究大学としての特質を踏まえ、FD や教員評価に係るメタ評価の基本方針の策定をはじめ、教員の教育力向上に向けた取組の大枠について全学的な合意を形成する。また、多様な教員構成の実現を加速するため、外国人教員や女性教員の採用に向けた重点的な取組を進める。さらに、教員の活力の維持に向けた新制度の導入（テニュア制など）や試行的実施を積極的に進めていく。

### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ ファカルティ・ディベロップメント（FD）の推進（FD 基本方針の策定、フューチャーファカルティプログラム(プレ FD)の導入)
- ▶ 教員評価に係るメタ評価の基本方針の策定
- ▶ ファカルティ・ハンドブックの作成、部局の教育改善取組のネットワーク化及び学外 GP (Good Practice) の情報提供の充実、大学総合教育研究センターの機能強化、教育情報の公表
- ▶ 若手研究者の採用を促進する仕組みの導入（「特例教授ポスト」の運用、研究費等の支援方策の検討）
- ▶ 外国人教員や女性教員の採用に向けた重点的な取組の推進
- ▶ 教員の活力の維持に向けた新たな制度（テニュア制など）の導入や試行的実施の推進
- ▶ サバティカル制度の実施促進に向けた検討
- ▶ 各部局の将来構想を考慮した、学部・大学院の学生定員の在り方の検討
- ▶ 優れた教育力を有する退職教員の教養教育などでの活用を念頭に置き、人材需給のマッチングを図る仕組みを構築
- ▶ 外国人教員が教育研究しやすい環境づくりの一環として重要事務文書の英文化

（主担当：理事 佐藤 慎一）

## 6. プロフェッショナルとしての職員の養成

法人化を契機に策定した「事務職員等の人事・組織・業務の改善プラン」の見直しを平成 22 年度に引き続き検討するため、人材育成・管理の在り方、人件費の在り方、組織の在り方、業務改革・情報化推進、事務組織の国際化対応の 5 つの WG を設置し、個別課題についてそれぞれ検討結果報告書にまとめた。人材育成については、職員の能力開発体制の強化を図るため「職員の人材育成の推進体制に関する基本方針」を検討し策定した。また、組織・業務改革については、引き続き組織の見直しを進め、組織のフラット化と柔軟化を図りつつ、業務の簡素化と合理化を進めることとした。

平成 24 年度以降においては、それぞれの検討結果報告書で提案している内容をもとに、職員の企画力・英語力の強化等の重要課題に対応するため、人材育成における人事部門と各部門、本部・部局の役割・機能分担を明確にした具体的な取組を順次実施していく。また、事務組織の合同化や業務のアウトソーシングを推進するとともに、情報システムの活用による業務改革を積極的に進めることとしている。

### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ 「東京大学職員の人材育成の推進体制に関する基本方針」に基づき、具体的な推進体制を整備
- ▶ 国際化に対応した職員の資質向上（職員の海外派遣研修、語学力向上に向けた TOEIC の有効活用など）
- ▶ 派遣研修等の見直し及び研修の充実（私立大学への研修出向の検討、「自己啓発支援ガイドブック」の作成を検討、バリアフリーに関する研修会の開催など）
- ▶ 人材活用の促進（副課長級と係長級の年功序列の昇進制度の見直し、職員評価の一層の適正実施、女性職員の管理運営への参画、メンタルヘルス予防体制の整備、職務復帰マニュアルの整備など）
- ▶ 総合技術本部において、技術職員全体の資質の向上や部局技術組織の整備支援体制を推進
- ▶ 高度な研究支援人材（リサーチ・アドミニストレーター）に関する制度の整備
- ▶ 事務組織の合同化や業務のアウトソーシングの推進
- ▶ 情報システムの活用による積極的な業務改革の実施
- ▶ 教職協働体制の確立

（主担当：理事 磯田 文雄）



## 7. 卒業生との緊密なネットワークの形成

卒業生との緊密なネットワークの形成に向けた活動として、生涯学習プログラム（「東大ワールドカフェ」、「グレートー東大塾」）の定着、外国人卒業生ネットワークづくり（台湾、中国、ベトナム、韓国、シンガポール、フランス、香港、インドの同窓会立ち上げ・設立支援、国内の外国人卒業生へのアプローチ）などに取組んだ。さらに、卒業生に対する各種サービスの提供（外国人同窓生向け英語メルマガ、TFT 特典他）や同窓会活動への支援（総会等への総長、理事の参加他）を行い、卒業生ネットワークの拡充に一定の成果を上げた。

平成 24 年度以降は、既存の卒業生プログラムの検証・見直しを行い、卒業生の知的活動を促進させる効果的な取組を進めるとともに、中期展望に立つ卒業生活動の方向性、体制の検討に着手する。また、赤門校友会、同窓会連合会をはじめとする関係者・団体との更なる連携強化、HP・メルマガ・TFT 登録画面の英語化を推進し、海外を含めた卒業生とのネットワークの拡充・更なる加速を図っていく。

### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ 卒業生向けの生涯学習プログラム（「東大ワールドカフェ」「グレートー東大塾」）の充実
- ▶ 卒業生の大学の活動への参画の促進
- ▶ 既存の卒業生プログラムの検証・見直しを行い、卒業生の知的活動の促進と卒業生活動の方向性・体制の検討
- ▶ 卒業生とのコミュニケーション強化（TFT 登録者へのサービス・特典の拡充による登録者増、入学時から生涯にわたり活用できるパーマネントアドレスの付与の実現に向けた検討など）
- ▶ SNS（フェイスブック等）を活用した卒業生コミュニティの拡充、外国人同窓生への情報配信の充実
- ▶ 同窓会活動の積極的な支援（ホームカミング日の改善、会報誌のデジタル化を含めた検討・見直し、地域同窓会への総長の参加、赤門校友会幹事会の活動促進、海外同窓会ネットワークの拡充など）

（主担当：理事 江川 雅子）

## 8. 経営の機動性向上と基盤強化

国の財政が厳しさを増す中、平成 24 年度政府予算案において大学関連予算については一定の配慮がなされたが、基盤となる運営費交付金の減額は続いている。このような状況の下、本学では基盤強化に向け、運営費交付金、施設整備費補助金、外部資金の獲得努力とともに、東大基金の強化、安定的な運用益の確保、自己収入の増加、事務・事業の見直しによる経費の節減に着手し、取組んでいる。また、新たな人事制度として、「特例教授ポスト」を制度化し、優秀な若手研究者のポストや人材流動性の確保に努めている。施設整備に関しては、施設修繕準備金制度の導入による計画的な修繕実施の方策について検討を進めている。

平成 24 年度以降は、柔軟な制度設計や効果的・効率的な資源の活用方法を検討し、具体化していくことが重要である。外部資金のさらなる活用や、人件費費目の多様性確保などに積極的に取組むことにより、教育研究環境の維持・向上を目指す。大学を取り巻く環境は大きな動きを見せており、大学改革を求める強いメッセージが寄せられている。本学も、主体的な改革を引き続きスピーディーに、かつ着実に進め、経営の機動性向上と基盤強化を図る。

### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ 「特例教授ポスト」及び「採用可能数運用の柔軟化」制度の運用、「年俸制助教」制度の見直しなど人事制度の柔軟化
- ▶ 持続可能な財務基盤の強化（「部局基金」設置の推進、「プレミアム・パートナーズ戦略事業」、「教職員 1 億円寄附達成（目標）キャンペーン」等による東大基金の充実・強化、自己収入増収方策の検討、安全・効率性のある長期運用など）
- ▶ 経費の節減の推進（印刷関連経費の縮減、新旅費システムの浸透、リバースオークションの本格導入及び全学展開、工事費節減に向けた検討など）
- ▶ 施設基盤の計画的整備に向け、施設修繕準備金制度の導入に向けた運用方法の整備
- ▶ 全学的な課題等に対して機動的に取組むための事務組織等の見直し・再編（情報システム本部と情報基盤センターの統合）
- ▶ 情報システムの最適化を検討
- ▶ 「東大サステイナブルキャンパスプロジェクト」（TSCP）に基づき、集中的な設備更新を行い、CO2 排出量削減を推進

（主担当：理事 前田 正史）



## 9. ガバナンス、コンプライアンスの強化と環境安全の確保

ガバナンス強化のため、組織の見直し等に関し組織の在り方 WG 等で検討を行い、報告書を取りまとめた。危機管理については、「本部における危機管理に係る事務処理要領」を策定した。コンプライアンスの強化については、基本規則の周知を図るとともに、部局におけるコンプライアンス教育の実態や体制の整備状況について取りまとめ、各部局に対して情報提供を行った。環境安全の確保については、廃棄試薬の処理を支援するため、薬品管理システムに廃棄試薬処理機能を追加した。また、本部と工学系等の部局が連携し、防災訓練を実施した。

平成 24 年度以降においては、WG 報告に基づき室・本部や事務組織の全体的な見直し・再編を行うとともに、危機事象に関する迅速な把握及び的確な処理を行うため、対応事例集を作成する。コンプライアンスの強化については、コンプライアンス教育の充実を図るとともに、部局におけるコンプライアンス教育と体制の整備状況について進捗を確認し、より一層の推進を図る。また、併せて各通報窓口等の運用状況や弁護士を活用実態について点検と検証を行う。環境安全の確保については、病院など部局と連携した防災訓練を実施する。また、「東京大学の防災対策（冊子）」を学内外の現状を反映した内容への改訂作業に着手する。

### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ ガバナンス強化のため、室・本部及び事務組織の全体的な見直し・再編による業務のスリム化・効率化の推進
- ▶ コンプライアンス教育の充実と部局におけるコンプライアンス体制の整備促進
- ▶ 危機事象への迅速な把握及び的確な処理を行うための対応事例集の作成
- ▶ 災害時に有効な防災体制の検討と、「東京大学の防災対策（冊子）」の改訂
- ▶ 防災体制の強化（被災建物等を診断する学内の応急危険度判定士の制度の整備、学生及び教職員の安否を迅速かつ適切に確認できる体制の確立、広域避難場所や帰宅困難者対応について関係自治体と協議、本部と部局が連携した防災訓練の実施など）
- ▶ 環境安全衛生の確保（薬品管理システムのバージョンアップ、薬品等の梱卸作業の推進、安全教育・講習会の実施、環境安全に関する意識啓発の推進など）

（主担当：理事 磯田 文雄）

## 10. 東日本大震災に関する救援・復興活動の推進

東日本大震災の被災地の救援・復興に向けた支援を組織的に行うため、「東日本大震災に関する救援・復興支援室」を設置するとともに、本学の構成員による被災地での救援・復興に関する活動を支援するため「遠野分室」、「大槌連絡所」を開設したほか、大学の専門性を生かし、被災地復興に向けた研究活動を支援する拠点として、「遠野センター」を開所した。また、個々の教員や部局等で自主的に行われている救援・復興に関する教育研究及び社会連携活動を全学的に推進するため、プロジェクトとして登録して活動を支援した。さらに、夏季には遠野市を拠点に学生、教職員から成るボランティア隊を派遣し、大槌町等の瓦礫撤去等の作業を行ったほか、冬季には陸前高田市に学生による学習支援のボランティアを派遣した。また、全学的に、救援・復興に向けた多岐にわたるシンポジウム、セミナー、市民講座等を開催し、多様な情報を発信した。加えて、大槌町等と救援・復興に関する協定を締結し、自治体との連携による組織的な推進体制を整えた。

平成 24 年度以降は、継続して活動への支援を実施し、中でもプロジェクト登録の事業への支援を推進する。また、学生や教職員による救援・復興支援活動を行うボランティア隊の派遣及び被災地のニーズに対応した学生による学習支援活動への支援・情報提供を行う。さらに自治体との連携強化を図りつつ、被災者への救援・復興支援活動をより一層推進させる。

### 【平成 24 年度以降の主な取組】

- ▶ 救援・復興支援室登録プロジェクト活動への支援の充実
- ▶ 被災自治体との連携強化による救援・復興活動の推進
- ▶ 学生や教職員によるボランティア隊の派遣及び被災地のニーズに対応した学生による学習支援活動等の支援の推進
- ▶ ボランティア活動報告会を継続して開催し、学生・教職員への情報提供を推進
- ▶ 「国内外の多くの人々が、「生きる。ともに」の感覚と意識と覚悟を共有し、日本全体の活力の再生に貢献する機運」を高められるように、救援・復興支援に関する広報を充実

（主担当：理事 前田 正史）

問い合わせ先：本部企画課（内線 22393）



# 特集 冠研究機構の誕生

## IPMUが4月よりKavli IPMUとなり前進!

国際高等研究所のもとにある数物連携宇宙研究機構 (Institute for the Physics and Mathematics of the Universe: IPMU) が、この4月に、米国のカブリ財団の名称を冠につけた「カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU)」となりました。今回の特集では、そのいきさつをご紹介しますとともに、こうした冠研究機構ができることの意味について考えたいと思います。

### 国際高等研究所のもとにあるIPMU

数物連携宇宙研究機構 (IPMU) は、平成19年度に文部科学省が公募した「世界トップレベル研究拠点形成プログラム (WPIプログラム)」の5拠点の1つとして採択され、柏キャンパスを拠点に活動を展開してきました。さらに、平成23年1月には、東大全体の学術の卓越性の向上及び国際化を強力に推進することを目的に設置された「国際高等研究所」のもと第1号機構となり、WPIプログラムによる支援終了後も大学において存在できる組織に位置付けられました。

IPMUでは、数学、物理、天文の連携により宇宙の起源と進化の解明を目指すという壮大なテーマを掲げ、現代基礎科学の最重要課題である暗黒エネルギー、暗黒物質、ニュートリノ、統一理論 (超弦理論や量子重力) を主たる研究テーマに、世界トップレベルの数学者、物理学者、天文学者の共同研究を展開しています。

そうした取り組みにより顕著な実績を上げてきたことは、昨年度のWPIプログラムの中間評価において、5拠点のうち唯一のS評価を得たことでも裏付けられます。

### ★ Kavli IPMUの特筆すべき特徴 ★

研究者の半数以上が外国人

公用語は英語

若い研究者の力が顕著

査読付き論文の本数多数

積極的なアウトリーチ

機構長の強いリーダーシップ

### Kavli IPMUの誕生

IPMUは、世界トップレベル研究拠点として着実に成長し、大学内での組織としての安定性も担保されました。

そうした実績が、世界の有力研究機関を支援する米国のカブリ財団に認められ、昨年度、カブリ財団から寄附を受け、基金を設立することにより、恒久的な支援を受けることになりました。

これにより、IPMUはこの4月から「カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli Institute for the Physics and Mathematics of the Universe: Kavli IPMU)」となり、世界で16番目となるカブリ研究所の一員として、新たな活動を始めました。

Kavli IPMUのあらたな一步に際した記念式典および記念講演会を、カブリ財団会長フレッド・カブリ氏らを迎えて、5月10日 (木) に開催しました。

### カブリ財団とカブリ研究所

ノルウェー生まれの米国実業家、フレッド・カブリ氏が設立した財団。世界の有力大学で4分野 (宇宙物理・ナノサイエンス・脳科学・理論物理) を支援している。

### カブリ研究所をもつ世界の15大学・機関

- ・スタンフォード大学 (米国) ・シカゴ大学 (米国)
- ・マサチューセッツ工科大学 (米国) ・北京大学 (中国)
- ・ケンブリッジ大学 (英国) ・カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (米国) ・中国科学アカデミー (中国)
- ・コーネル大学 (米国) ・カリフォルニア工科大学 (米国)
- ・デルフト工科大学 (オランダ) ・ハーバード大学 (米国)
- ・コロンビア大学 (米国) ・カリフォルニア大学サンディエゴ校 (米国) ・イエール大学 (米国)
- ・ノルウェー科学技術大学 (ノルウェー)



## Kavli IPMUになることの意味

### 世界的なビジビリティを高める

これまでも冠を付した建物や講座はありますが、海外の財団名を掲げた研究組織は、国立大学法人では初めてです。単に名前の変更というだけでなく、こうしたカブリ研究所の仲間入りできたことは、IPMUのみならず東京大学の世界的なビジビリティを高めることに大いに貢献することになります。

### 基金の運用益で、自由な研究活動が可能に

寄附金(750万ドル)による基金からの運用益により、IPMUの研究を恒久的に支援する仕組みができました。基金の運用益は、通常の研究費では使用しづらい優秀な研究者の誘致や萌芽研究の予備研究等にも活用できるので、国際競争力をさらに強化できます。

また、10年という時限付きのWPIプログラムによって設立された研究機構にとって、こうした仕組みを導入できたことは、組織を恒久的なものにするための強固な基盤となりました。

### 東京大学としてのインパクト

Kavli IPMUの誕生は、一研究機構にとどまらず、東京大学全体の取組みの大きな弾みとなりました。

●運営費が年々減少し、研究費は外部資金に頼る傾向が大きくなっていますが、プロジェクトベースになる外部資金はその使用用途に制約がつきがちです。大学の多様な資金の確保という点でも、永続的な資金の確保や海外からの新しいスキームでの資金の導入などができた今回のケースは、行動シナリオで東大が目指す新しい大学像に一步前進したとも言えるでしょう(図1)。

●自主財源の確保・拡充が喫緊の課題ですが、アメリカなど海外の大学に比べて日本では寄附文化が根付いていないため、寄附金集めは難しい面があります(図2)。カブリ財団という世界的に著名な財団からの寄附を得たということは、特に基礎科学分野における寄附集めの起爆剤になる可能性もあります。これを機に、寄附税制改正などの制度改革に向けての働きかけをさらに活発に行っていく必要もあります。

●大学内に冠をつけた組織を設置することには、十分な議論と注意が必要です。ただし、大学・研究の環境基盤を強固にするためには、新しいスキームなどを考え、トライすることも必要であり、正に今回の出来事は大学改革の中の重要な成果の1つとして位置づけられます。

## 『東京大学の行動シナリオ FOREST2015』より

「学術の多様性の確保と卓越性の追求」

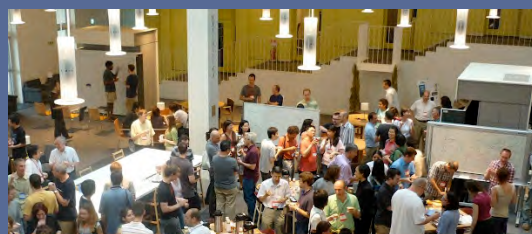
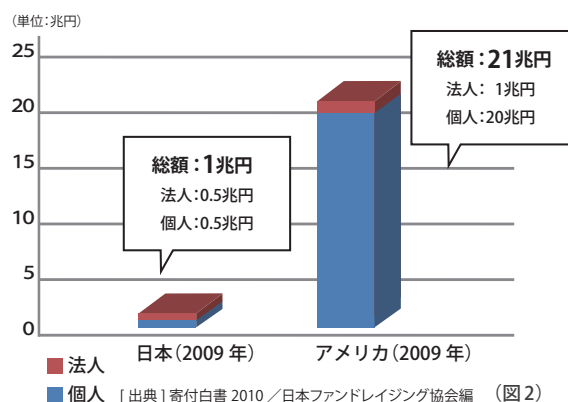
世界最高水準と認知されるハブ拠点

「経営の機動性向上と基盤強化」

2020年までに2,000億円の基金の確立を目指す

(図1)

### 寄附に関する日米比較(総額)



Kavli IPMUの3時恒例のティータイム風景。日常のフリーディスカッションから、偉大な発見につながるヒントも生まれる!

### Kavli IPMUに関して / Kavli IPMU 広報担当

内線: 65977 press@ipmu.jp

### その他・紙面に関して / 広報課

内線: 22031 kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



# NEWS

## 一般ニュース

### 産学連携本部

シンポジウム「中長期的な視点に立った多対多型産学官連携モデル」—大学等産学官連携自立化促進プログラム—

基礎・基盤分野を重視した産学官連携の新しい形を議論するシンポジウム「中長期的な視点に立った多対多型産学官連携モデル」（主催：産学連携本部）を2月29日（水）、山上会館で開催した。文部科学省から追加交付を受けた補助金での調査研究報告会として実施。産業界と大学関係者約100名が参加し、現在の産学連携活動の課題提起を含め、産業界と大学からこれまでの1対多、多対多の連携の長所と課題の紹介、米国における競争力の向上を図る目的で始まった「Engineering Research Center (ERC)」をテーマにしたパネルディスカッションなどを行った。



新しい産学連携の形に関する提案を熱心に聞く参加者

第一部「産学連携に関する施策」の中で、文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課 里見朋香課長は、「組織対組織でつながり始めた産学官連携を、今後はグローバル化・オープンイノベーションの観点で

育てていくことが重要」として、初期段階から金融機関や仲立ちをする多様なプロモーターなどを巻き込み、ネットワークを強化することが重要であるとした。また、経済産業省産業技術環境局大学連携推進課 進藤秀夫課長は、産学連携活動を明確にミッションとして位置づけるためのインセンティブシステム再構築について触れ、「早い段階での議論によって研究者に社会ニーズをインプットできるため、共同研究のやり方の幅を広げていくという意味で、早期の産学相互の意見交換に注目している」とした。本シンポジウムの主催者である産学連携本部 太田与洋教授からは、「十数年間の産学連携活動の基盤整備に続き、次に何をすべきか具体的に検討したい」として、大学研究者が自らの意志でオリジナリティを追求し、研究・教育活動をしながら生み出しつつあるシーズと、企業が確信を持っていない将来ニーズが交わるセグメントにおける産学官連携スキームの必要性に対し、共通認識を持つことへの期待が示された。

第二部「現状モデルの紹介（長所と課題）」では、民間資金ベースの例として、情報理工学系研究科 江崎浩教授から「東大グリーン ICT プロジェクト」が紹介された。コンプライアンス上の制約が少ない民間資金ベースの利点を活用して、「多対多型の産学連携においては、共生することに対するの勇気を持つことと、産業セグメントにおけるステークホルダーをどれだけ取り込めるか、産業界を進化させ、いかにグローバルに戦わせるかが重要な視点」とした。また、企業側から見た産学連携の例として、三菱化学㈱経営戦略部門 RD 戦略室 中村友久部長が、同様の方式で有機系エレクトロニクス・デバイス開発に取り組んだ「京大アライアンス」について報告。「産学連携で生み出すべきものは技術ではなく価値。異業種企業連合および技術の垂直連携はコンソーシアムを組みやすい」と、情報のオープン化が難しいとされる産学連携において、京大アライアンスで行われた垂直連携のメリットを挙げ、企業の事業戦略にマッチする将来技術の基盤整備や、社内にはない技術の獲得など、企業の経営者側から見た産学連携の位置づけを強調した。

続いて、公的資金ベースによる事例として、工学系研究科 大津元一教授が「NEDO ナノフォトニクス特別講座」を紹介。国際市場の開発を目的に経済産業省の指導で作られた経緯に触れ、実情として「産学連携活動を始める際には企業間の調整が必須で、有能なマネージャーの存在が決め手。運営費交付金を減額されるといった“プロジェクト貧乏”の発生にも注意する必要がある」などと課題事項に言及した。東京工業大学大学院理工学研究科 谷岡明彦教授は、ナノファイバー研究のための大型装置を作る際に、その実用化技術を並行開発した経緯をはじめ、最後まで懸念事項となった知財の取り扱いや、10本近い共同研究契約を調印するまでに1年を要したことなどについて具体的に紹介。また、人材育成として学生も対象に含めて実施した「NEDO 講座」を取り上げ、「こういった場で学生を教育できることは重要で、NPO



法人の学会を発足させ、このプロジェクトの活動を継続させる」と現状を報告した。

続いて行われたパネルディスカッションでは、本学産学連携本部産学連携研究推進部 増位庄一プログラムオフィサーが「米国大学調査に基づく中長期的視点に立った基礎・基盤分野に配慮した複数企業との産学官連携モデル検討の提案」と題して、米国产学官連携研究センターにおける先進的なプログラムについての調査結果を発表。大学が主導してプロジェクトの設計運営を行うことの重要性を示し、大学中心の基礎基盤研究を強化した日本型モデルの構想化を提唱した。



積極的な意見が出されたパネルディスカッション

ERCのモデルをベースに行われたパネルディスカッションでは、「自社ですべてのリスクを負えない昨今、優秀な技術を持つ外部機関に投資するのは選択肢のひとつ。多対多型のコンソーシアムであれば喜んで参加する」（株日立グローバルストレージテクノロジーズ日本研究所 田河育也部長）、「自社内とは全く違う見方や分野への展開の場として活用するには非常に良い。目的意識を持った参加型の大きな枠組みの中で動くのは非常にやりやすい」（三菱化学(株)経営戦略部門 RD 戦略室 中村友久部長）といった積極的な意見が出された。

参加者からは「産学官連携について多面的な視点でまとまった議論や事例を聞いたのは初めての経験で、大変有意義だった」「モデル検討の提案にぜひ参加したい」といった声が多く寄せられるなど、今回のシンポジウムを契機として、日本に合ったイノベーションに繋がる多対多型産学官連携モデルの検討開始が見込まれる。

#### 産学連携本部

東京大学産学連携協議会 平成23年度「第2回アドバイザリーボードミーティング」「年次総会」を開催

東京大学の知と産業界の知を融合させた、社会に役立つ新しい価値の創出を目的に、東京大学産学連携協議会の「平成23年度第2回アドバイザリーボードミーティング（ABM: Advisory Board Meeting）」および「平成23年度年次総会」を3月2日（金）、伊藤国際学術研究

センターにて開催した。産業界との連携強化を図ろうと、2005年1月に設立されて以来、会員数は年々増加し、現在734社（2012年2月現在）。産業界と本学の双方向的な連携推進のプラットフォームとして、社会に寄与する価値を多様な形態で創造するための重要な基盤である。

ABMは同センター特別会議室にて開催され、本学から濱田純一総長、各理事および保立和夫産学連携本部長ほかが出席。産業界から、野村ホールディングス(株) 氏家純一常任顧問、(株)日立製作所 川村隆取締役会長、東レ(株) 榊原定征代表取締役会長、(株)小松製作所 坂根正弘取締役会長を迎え、活発な意見交換が行われた。



東京大学産学連携協議会 ABM で挨拶する濱田総長

冒頭、濱田総長は、「東日本大震災の復興支援活動を学内挙げて取り組んでいる。今後は、産業界からもご提案をいただき、ともに復興支援の取り組みを強化していきたい。秋入学構想に関しては、大学での主体的な機構および意識改革を積極的に推進していくので、是非ともご理解とご支援をお願いしたい」と挨拶し、産業界との多面的な連携の意思を表明した。

続いて保立産学連携本部長が、アントレプレナー道場、科学技術交流フォーラム／国際産学連携フォーラム、シンポジウム「イノベーション・起業の新たな展開」等の活動内容を報告。新たな取り組みとして、復興・支援プロジェクト産学連携提案会や、「アジア・アントレプレナーシップアワード2012」の活動概要を報告した。

次いで、2008年度 ABMでの意見交換をきっかけに活動がスタートした産学コンソーシアム「ジェロントロジー（老齢学）」について、高齢社会総合研究機構 鎌田実機構長がこれまでの活動を報告。最終的な参加企業が45社にまで増え、20回以上の総括議論を行うなど、幅広い分野の産業界からの関心の高まりがあること、東日本大震災の被災地である遠野市と釜石市でのコミュニティケア型仮設住宅設置や、大槌町での仮設コミュニティづくりの支援・研究活動等、学際的に多岐にわたる課題解決を図っている点など、活発な活動内容が紹介された。

産業界からは「短期間にもかかわらず、非常に重要な活動を幅広く展開しており、個々の活動内容も大変興味



深い。ご努力に敬意を表したい」といった賞賛の言葉を多数いただいた。本学への要望として、「雇用延長のインセンティブや補助・支援を組み合わせた啓蒙を期待したい」「国を活性化するためにも、シニア世代の活用は非常に重要。東大がイニシアティブをとり、発信してほしい」「各自自治体への財政的・資金的な具体化提案を合わせて行い、モデルケースを作れば、国全体に波及しやすくなるのでは」といったご意見を頂戴した。

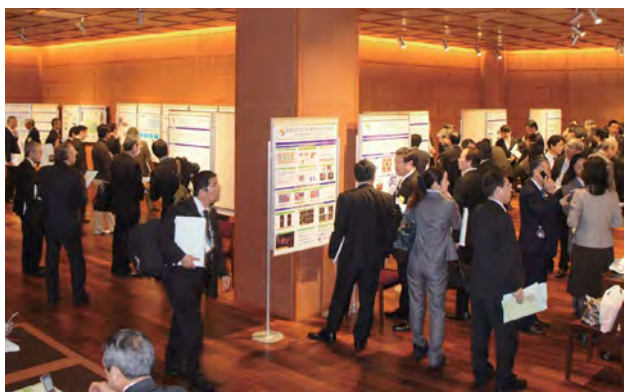
最後に、松本洋一郎理事・副学長が「日本は課題解決先進国として、ジェロントロジーにおいてもイニシアティブがとれる。本学はその中心として、世界に打って出られるような仕組みづくりを提案・構築していきたい」と締めくくった。

引き続き、地下2階の伊藤謝恩ホールで行われた東京大学産学連携協議会年次総会には産業界から262名の参加があった。



東京大学産学連携協議会年次総会で挨拶する濱田総長

冒頭の挨拶で濱田総長は、東日本大震災後1年を経た現在も精力的に取り組んでいる復興支援を継続的に実現するためにも、「行動シナリオ」を確実に実現する重要性について言及。続いて、(株)小松製作所 坂根正弘取締役会長の来賓挨拶の後、保立産学連携本部長が当本部の活動を報告。また、特別講演として、工学系研究科航空宇宙工学専攻 中須賀真一教授が、「超小型衛星による新しい宇宙開発・利用への挑戦」を行った。



好評をいただいたポスターセッション

研究発表スペースでは、今回初めての試みとして、当

本部が編集する『産学連携プロポーザル』にまとめられた共同研究をテーマとしたポスターセッションを設置。研究者自らが発表を行い、その研究成果や研究リソースを直接聞ける貴重な場が設けられたこともあり、研究者を囲み、会場の随所で和やかに交流が図られた。

ABMをきっかけに発足したジェロントロジーの活動、大震災発生後の協力・支援活動から得た教訓など、本学における産学連携活動がさまざまな形で実を結びつつある。今回の産学連携協議会 ABM および総会が、さらなる連携の強化に繋がることを期待している。

東京大学産学連携協議会：

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/kyogikai/message.html>

産学コンソーシアム ジェロントロジー：

[http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/research/network\\_gerontology.html](http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/jp/research/network_gerontology.html)

一般

本部資産課

平成23年度ノートPCリユース事業の実績報告について

資産管理部資産課では平成21年6月に「ノートPCリユースオフィス」を設置し、教職員の皆様よりご提供いただいたパソコンを再生し、学生に無償レンタルしている。

昨年度も皆様のご協力により、83名の学生にパソコンを手渡すことが出来ました。今後とも、本事業へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

■平成23年度ご提供台数<部局別内訳>

部局名	台数
法学政治学研究科・法学部	8 (1)
医学系研究科・医学部	12
工学系研究科・工学部	45
人文社会系研究科・文学部	1
理学系研究科・理学部	57
農学生命科学研究科・農学部	14
経済学研究科・経済学部	16
総合文化研究科・教養学部	23 (1)
教育学研究科・教育学部	3
薬学系研究科・薬学部	20
数理科学研究科	6 (1)
新領域創成科学研究科	14
情報学環・学際情報学府	12
情報理工学系研究科	5
総合研究博物館	1
人工物工学研究センター	5
大学総合教育研究センター	8



空間情報科学研究センター	1	
医学教育国際協力研究センター	7	
情報基盤センター	4	
医科学研究所	14	
地震研究所	2	
東洋文化研究所	8	(1)
社会科学研究所	1	
生産技術研究所	8	
史料編纂所	2	
分子細胞生物学研究所	1	
物性研究所	8	
先端科学技術研究センター	7	
大気海洋研究所	2	
医学部附属病院	12	
図書館	7	
本部	4	(1)
計	338	(5)

※ ( ) 内は個人等からの寄贈品 (内数)

#### 【リユースの対象となるノートパソコン】

研究室等で使わなくなったノートパソコンで、Windows XP 以降のライセンスシールが添付されているもの。  
(現在のところ、Mac は対象外です。)

#### 【ノートパソコンの回収連絡先】

美津野商事(株)システム事業部 (本学の委託業者)

E-mail : reuse@mizuno.net

TEL : 03-3943-0181 FAX : 03-3943-5181

(担当 : 川崎・三浦)

#### 【事業への問い合わせ等】

ノートPCリユースオフィス (資産管理部資産課内)

E-mail : pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp 内線 : 22135

(担当 : 小川・戸田・牧迫)

本部人材育成課

平成 24 年度新任教職員研修を開催

4月5日(木)から6日(金)にかけて、安田講堂において平成24年度新任教職員研修が開催され、5日は741名、6日は698名の参加があった。

今回で3回目となる本研修は、新任教職員が東京大学の構成員として必要な法令、規則等の基本的知識を取得することを目的とし、本学におけるコンプライアンスの徹底並びにFD・SDの取組みの一環として実施された。



清水孝雄理事・副学長による開講挨拶

開講の挨拶において、清水孝雄理事・副学長は、新任教職員への歓迎の言葉とともに、「東京大学のような大きな組織には、しっかりした戦略とガバナンスが必要であり、定められたルールは守る必要がある」「東大の教職員は社会的に注目される対象であり、そうした緊張感には常に持つ必要がある」として、本学教職員の責務、心構えについて述べられた。

さらに、「大学には真理の追究という学術的責務と同時に、先進的な教育・研究・診療などを通して社会に貢献する責務があり、常にこの2つのバランスをとる必要がある」「この大きなミッションを担う事は大変なことだが、大変誇りのある、また、明日の日本に向けてやりがいのある仕事である」と新任教職員を激励し、「本学の基本原則である東京大学憲章と濱田純一総長の行動シナリオの実現に向かって努力してほしい」と力説された。

そして最後に、前回の研修で濱田総長が述べられていた「ルールを守るだけでなく、より良いルールとは何かを考えてほしい」という言葉を紹介し、「ルールと真剣に向かい合うには、何よりもまずそのルールをこの研修でしっかりと理解してほしい」と述べられた。

最終日には、参加者の理解度を測るため確認テストが実施された。限られた日程の中で、多岐にわたる内容であったが、新任教職員が本学で勤務していく上での基礎的知識を集中して得られる有意義な機会となった。



会場の様子



本研修の講義内容と講師は次のとおりである。

『平成 24 年度新任教職員研修日程』

○ 4 月 5 日 (木) 9 : 35 ~ 17 : 25

- ・「挨拶」 理事・副学長 清水 孝雄
- ・「高等教育政策、国立大学法人の仕組み」  
副理事・経営支援担当部長 鈴木 敏之
- ・「学務・学生支援」 教育・学生支援部長 富田 靖博
- ・「監査」 本部監査課長 遠藤 勝之
- ・「情報セキュリティ・情報倫理・情報システム」  
情報システム本部副本部長・准教授 玉造 潤史
- ・「研究」 本部研究推進課長 糸井 和昭
- ・「外部資金」 本部外部資金課長 根本 義久
- ・「ハラスメント」  
ハラスメント相談所チームリーダー (専門員) 矢野 ゆき
- ・「アカデミックハラスメント」  
学生相談ネットワーク本部学生相談所長・教授 倉光 修
- ・「メンタルヘルス」  
学生相談ネットワーク本部・教育学研究科教授 佐々木 司  
学生相談ネットワーク本部学生相談所長・教授 倉光 修

○ 4 月 6 日 (金) 9 : 30 ~ 17 : 15

- ・「本学の財務状況」 本部財務課副課長 部 正規
- ・「物品・サービスの購入」  
本部契約課副課長 渡邊 仁之
- ・「出張旅費の仕組み」 本部契約課長 片桐 徹
- ・「会計システム」 本部決算課長 山崎 正人
- ・「資産の管理」 本部資産課副課長 渡邊 慎二
- ・「コンプライアンス基本規則」  
本部法務課長 加藤 貴彦
- ・「情報公開」  
総合企画部長事務代理・本部総務課長 吉田 博之
- ・「安全保障輸出管理」  
安全保障輸出管理支援室長 渡部 俊也
- ・「産学連携」 産学連携本部知的財産部長 小蒲 哲夫
- ・「就業規則・サービス」  
本部労務・勤務環境課長 増田 浩一
- ・「環境安全・防災」  
環境安全本部 企画調整部長・教授 土橋 律  
安全衛生管理部長・教授 大久保 靖司  
主幹・准教授 刈間 理介



バリアフリー支援室

「平成 24 年度新規採用チームコーディネーター研修会」開催される

バリアフリー支援室は、4 月 18 日 (水) に大学院理学系研究科附属植物園・本園 (小石川植物園) において「平成 24 年度新規採用チームコーディネーター研修会」

を開催した。

本研修会は、障害のある職員の業務をコーディネートする職員に対し、本学のバリアフリー支援に関する理解の促進を図ることを目的とし、昨年度から実施している。今回は、対象となるチームコーディネーターが所属する部局の支援実施担当者にも参加を呼び掛け、7 名が受講した。

開会に先立ち、若原恭バリアフリー支援室本郷支所長から挨拶があり、本学のバリアフリー支援の現状と、受講者に対するコーディネーター業務への期待が述べられた。

午前の部では、始めに、吉田雅彦本部人材育成課長から東京大学職員としての在り方及び本学の障害者雇用の現状について説明が行われた。次いで、矢口隆紀バリアフリー支援室係長から、バリアフリー支援室の概要及び支援体制について具体的な説明が行われた。その後、東京経営者協会障害者雇用アドバイザー中居紀二氏から、障害者雇用の概要及び障害者雇用におけるコーディネーターの役割について講演が行われた。

午後の部では、理学系研究科附属植物園阿部紗智子特任専門職員から、附属植物園における障害者雇用の現状及び知的障害や自閉症の特徴について説明があった。次いで、受講者が 3 グループに分かれ、当日業務について指示方法、対応方法を協議してから、附属植物園で働く障害のある職員とともに、園内のトイレ清掃、落ち葉掃き、ゴミ拾いなどの実習を行いながら、コーディネーター業務について考える機会を持った。実習終了後は、受講者全員で一日を振り返り、感想や意見を出し合う中でコーディネーターの役割を改めて認識し合った。

最後に、毎日行われる障害のある職員の「帰りの会」を見学し、本研修を締めくくった。



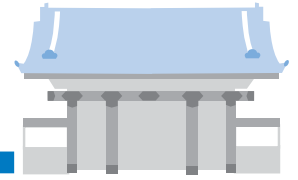
講義の様子





受講者と附属植物で働く職員との記念撮影

## 部局 ニュース



先端科学技術研究センター



木製3m風洞を特別公開

先端研発足25周年事業の一環として、風洞運営委員会（委員長・岩崎晃教授）は3月13日（火）、戦後初の国産旅客機「YS-11」や総飛行距離の世界記録を樹立した「航研機」の開発実験が行われた風洞実験棟（1号館）の木製3m風洞の特別公開イベントを開催した。

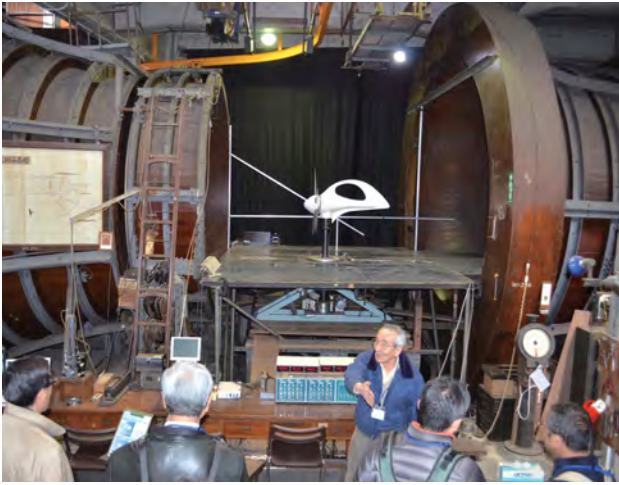
木製3m風洞は、駒場リサーチキャンパスがまだ帝国大学航空研究所だった1928年に設置された今なお現役の実験施設で、一般向けに稼働した風洞を公開するのは今回が初めて。1号館内には風洞で用いられた実験器具や風洞の歴史を紹介するパネルなどを展示する「風洞ギャラリー」が設置され、来場者が興味深そうに見入っていた。

特別公開では、7回に分けて風洞を動かすデモンストラーションが行われ、公募で集まった一般の方約80人や元技官、元先端研客員教授の立花隆さんら計約100人が参加。風洞の中央に小型風車を設置して、風洞の人工的な風を利用した発電の模擬実験が行われた。ごう音とともに風洞が稼働し、風車が回り出すと、見学者からは歓声が上がった。

ギャラリーは3m風洞がある実験室の入り口に設置され、風洞実験棟で保管されていた携帯用の計算尺や風洞の性能を測る実験器具のほか、航研機（航空研究所長距離機）の模型と世界記録を樹立した際に授与された証書などが展示された。ギャラリー化にあたっては、約半年前から風洞運営委員会や先端研有志が風洞実験棟内の清掃や整備を行って準備を進めていた。

また、この日の特別公開に合わせて、14号館カフェでは、航空研究所時代から現代までの図書室に残された「蔵書印展」（図書室主催）のほか、特別公開記念講演会も開催された。





3 m木製風洞で小型風車を回す模擬実験を行った



宇宙航空研究開発機構の國中均教授らが講演

大学院農学生命科学研究科・農学部  
**緑地植物実験地 閉所式を開催**  
 部局

3月24日（土）、千葉市花見川区にある農学生命科学研究科附属生態調和農学機構緑地植物実験地の閉所式が執り行われた。この地は、60年余り前の昭和29年に園芸実験所（その後、緑地植物実験所へ名称変更）が開所されて以来、長らく緑地植物に関する教育研究の場となってきた。しかしこのたび、その機能を西東京キャンパス（仮称）へと移転することとなった。これに先立つ平成22年4月1日、緑地植物実験所と西東京市にある附属多摩農場が改組され、演習林田無試験地の教育研究機能を取り入れて、同附属生態調和農学機構が設立された。西東京への移転作業が順調に進み、ほぼ平成23年度中に移転作業が完了する見込みとなったことから、この日、閉所式を執り行う運びとなった。

当日は、13時より緑地植物実験地の現地見学会が開かれ、その後、隣接する検見川運動場のセミナーハウスに場所を移して、閉所式の式典と講演会が行われた。参加者は、園芸実験所・緑地植物実験所を支えた元教職員、この地で研究生活を送り、あるいは実習を行った卒業生、現生態調和農学機構の関係教職員、農学部事務職員など、

約40名を数えた。

式典では、長澤寛道農学生命科学研究科長、松本洋一郎理事・副学長、小林和彦生態調和農学機構長、北村文雄元緑地植物実験所長から挨拶があり、その後、小林和彦機構長が閉所を宣言した。つづいて、武内和彦教授から、緑地植物実験所の足どりと西東京における今後の展開について講演があり、これまで培った有形無形の資産を活かしつつ、農林業における生態系サービスなどの分野も強化していくという、緑地研究分野の今後の展開が語られた。さらに、堤伸浩教授より、園芸実験所時代より収集・開発し、今では国内屈指の品種数を有する花ハスコレクションを用いた研究の可能性について講演が行われた。

その後の懇親会では、緑地植物実験地の懐かしい風景のスライドが映し出されるとともに、閉所式のために用意された緑地植物実験地の八重桜の塩漬けが振る舞われた。文字通り、思い出話に花が咲くひとときとなった。

緑地植物実験地閉所は残念であるが、西東京キャンパス（仮称）への移転により、緑地研究がより豊かな実りを結ぶものと期待される。



閉所宣言を行う小林機構長



小雨の中行われた現地見学会



## 先端科学技術研究センター

部局

### 石川県と再生可能エネルギー分野で協定を締結

先端科学技術研究センターは石川県、石川県産業創出支援機構と3月29日（木）、再生可能エネルギー分野の研究開発の連携・協力に関する協定を結んだ。先端研が自治体と協定を結ぶのは今回が初めて。

中野義昭所長は協定式で、「石川県には相互に利益を出せるWIN WINの種がいっぱいある。大学が積極的に現場に出て、貢献できることを実証したい」、谷本正憲知事は「県内にはきらりと光る中小企業がたくさんある。互いに高め合っていくよう連携をより強固なものにしたい」とそれぞれ決意を語った。

6月には石川県での先端研の活動拠点を金沢市の県会場産業振興ゾーンに設置。2カ月に1回のペースで太陽電池など再生可能エネルギーを専門とする教授を石川県に派遣し、セミナーを実施する。



握手を交わす中野義昭所長（左）と谷本正憲石川県知事

## 大学院工学系研究科・工学部

部局

### テクノサイエンスカフェ『見て触れてナットク!旅客機の最新技術』の開催

3月31日（土）に大学院工学系研究科主催、国際工学教育推進機構及び大学発教育支援コンソーシアム共催によりテクノサイエンスカフェを開催した。当日は小中高生とその保護者を合わせて約90名の参加があった。6回目となる今回のテクノサイエンスカフェでは、航空宇宙工学専攻の4つの研究室の協力により「空気力学」「構造と材料」「推進」「制御」という複数の側面から旅客機の最新技術を紹介することができた。

テクノサイエンスカフェは藤本浩司航空宇宙工学副専攻長の挨拶に始まり、鈴木真二教授による最新の旅客機についての講義があった。その後参加者は4班に分かれ

て順に研究室を訪問した。



熱心に講義を聴く参加者の様子



青木・横関研究室でCFRPの強度試験を見学する参加者

参加者は4つの研究室を訪問する中で、飛行機がうまく飛ぶために必要な条件や、それを実現するために必要な材料・構造を知った。大きな推進力と引き換えに起こる騒音への対策研究にも触れ、さらに航空機の制御の仕組みや操縦方法も学ぶことができた。このように具体的な研究を間近に見ることで、小中高生については航空機の研究が将来の選択肢の一つとして加わった可能性がある。終了後のアンケートでは「工学への関心が高まりましたか」の問いに「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した小中高生が約90%に上った。自由記述欄では「マイクロジェットの研究がしたい」等の具体的な感想も多かった。さらに運営に関わった学生へのアンケートでは「説明することで自分自身の知識を整理したり見直したりすることができた」という回答が過半数を超え、学生側にも効果があったと考えられる。

テクノサイエンスカフェは、参加者にとっては将来の目標を思い描くきっかけになるものであり、学生にとっては知識を整理したりコミュニケーション能力を高めたりする機会を得られるという、双方に効果がある企画と言えそうだ。



## 情報基盤センター

### スーパーコンピュータシステム柏拠点 開所式を開催

情報基盤センターでは、4月2日（月）に柏キャンパス第2総合研究棟において、スーパーコンピュータシステム柏拠点開所式を開催した。式典では松本洋一郎理事・副学長の挨拶に始まり、岩本健吾文部科学省研究振興局情報課長や平尾公彦理化学研究所計算科学研究機構長からご祝辞をいただいた。

柏キャンパス第2総合研究棟に導入された最初のシステムである次期スーパーコンピュータシステム（愛称：Oakleaf-FX）は、ピーク性能1.13 PFLOPSを有しており、従来と比較してピーク性能、消費電力あたりの計算性能ともに約8倍となる高性能・低消費電力なシステムである（有限要素法、差分法タイプのアプリケーションの場合）。愛称「Oakleaf-FX」はその設置場所である柏キャンパスにちなんでいる。

情報基盤センターは、全国8大学の情報基盤センターより構成されるネットワーク型拠点「学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点」の中核拠点、また革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ（HPCI）の拠点として活動している。同センターの運用するスーパーコンピュータは企業も含めた学内外の様々な科学技術分野の研究開発に利用され、また、東京大学大学院で実施しているHPC（High-Performance Computing）教育にも活用されている。「Oakleaf-FX」は、これらの活動へのさらなる充実と進歩に貢献し、将来の計算科学を担う人材の育成に資するものとして期待されている。

「Oakleaf-FX」は4月2日（月）から試験運転を開始し、7月2日（月）より正式サービスを開始する予定である。試験運転期間中の負担金は無料である。システムとサービスの詳細については、情報基盤センタースーパーコンピューティング部門のウェブサイトに掲載している。  
<http://www.cc.u-tokyo.ac.jp/>



スーパーコンピュータシステム（愛称：Oakleaf-FX）



施設見学の様子



式典の挨拶を行う松本洋一郎理事・副学長

## 大学院経済学研究科・経済学部

### 学生サポートルーム開設

大学院経済学研究科・経済学部では、4月に赤門総合研究棟6階に学生サポートルームを開設した。

近年心理的な悩みを抱える学生が増える傾向が見られ、この対応策として、このたび、学生サポートルームを設置し、経済学研究科・経済学部の学生及び教職員に対し対人関係、心身の健康、進路・学業等の悩みの相談に対応できる体制を整えたものである。

学生サポートルームは臨床心理士という臨床心理学に基づく専門職の2名で相談に応じ、教員・事務職員とも連携して、サポートしている。

経済学部進学生に対するガイダンス及び大学院ガイダンスが4月4日（水）に行われ、その中で相談員より、学生サポートルームを紹介され、学生生活を送る上で困ったことや疑問に思ったことがあれば、幅広く相談できるので利用してほしいとの説明が行われた。





写真左から、神谷和也室長（副研究科長）、小幡道昭教務委員長、国友直人研究科長、石原俊時室員（准教授）、海老根理絵相談員、持田信樹室員（教授）、平野真理相談員

### 生産技術研究所



先進モビリティ研究センター（ITSセンター）国際シンポジウム「International Symposium on ITS Research 2012 in Kuala Lumpur」開催される

4月14日（土）9時よりマレーシア・クアラルンプールの Hotel Armada Petaling Jaya の Atlanta East Ballroom にて、先進モビリティ研究センター（ITSセンター）および Institution of Engineers, Malaysia (IEM) の主催で ITS (Intelligent Transport Systems: 高度道路交通システム) に関する国際シンポジウムが開催された。本シンポジウムは、2008年から毎年（ただし、ITS World Congress が Asia-Pacific 地域で開催される年を除く）開かれる Asia-Pacific ITS Forum & Exhibition の Special Academic Program として開催しており、今年はシンガポール、バンコク、台北に続いて4回目となる。ITSの発展のために、交通、情報、機械工学の研究分野の融合と国を超えた共同活動がより重要となっていることから、毎回、様々な国から専門家を招いて開催している。今年は日本、マレーシア、台湾、オーストラリアの4か国14名の専門家をお迎えして各国のITSの情勢報告と意見交換を行った。

IEMの Vincent Chen Kim Kieong 会長と須田義大 ITSセンター長の開会挨拶から始まった本シンポジウムでは、ITS Japanの天野肇常務理事、ITS Malaysiaの Mohamad bin Husin 会長のご挨拶も頂き、本セミナーへの大きな関心が示された。第1部 ITS Innovation では、マレーシアの Mohamed Rehan bin Karim 教授、台湾の Jason Chang 教授、ITSセンターの牧野浩志准教授の3名が、路車間通信の現状・あり方、ウェブやクラウド技術を活用した新しい公共交通サービス等、益々発展するITSの最新動向に関する発表を行った。第2部 Traffic Management では、マレーシアの Ahmad Farhan Mohd Sadullah 教授、東北大学の桑原雅夫教授（ITSセンター兼任教授）、愛媛大学の吉井稔雄教授、オーストラリアの Edward Chung 教授（ITSセンター客員教授）

の4名が、最新の交通センシング技術・制御技術、ブルートゥースを利用した交通管理技術等について講演した。第3部 Vehicle Control & Image Processing では、ITSセンターの須田義大教授および池内克史教授、マレーシアの Riza Atiq Rahmat 教授および Tay Yong Haur 准教授の4名が、持続可能なITSのための車両制御技術、最新画像処理技術のITSへの活用、アンドロイド基盤プラットフォームを活用したITSアプリケーション等について講演した。第4部 Sustainability では、ITSセンターの大口敬教授および洪性俊助教、タイの Sorawit Narupiti 准教授の3名が電気自動車（EV）の普及を想定した急速充電ステーションの最適配置、交通シミュレーションを利用した環境評価技術等について講演し、活発な議論が行われた。聴衆のほとんどはマレーシア現地のITS関連専門家・エンジニアであったが、各国、特に日本のITSに関する最新研究動向については熱い興味を示すなど、本シンポジウムは大盛況で終わった。



シンポジウム会場の様子

### 東洋文化研究所



教職員等歓迎会を開催

4月19日（木）に東洋文化研究所1Fロビーにおいて、4月に異動してきた教職員等の歓迎会が開催された。歓迎会には教職員のほか、日本学術振興会特別研究員（PD）や外国からの訪問研究員なども加えて総勢50名ほどが出席した。

歓迎会は、大木康所長の挨拶、前田正史理事・副学長による乾杯の後、歓談に入った。宴たけなわになった頃、教職員や訪問研究員の自己紹介などを行い、20時近くまで続き、日頃あまり面識のない人たちと交流を深めることができた。





集合写真

## 赤門学友会からのお願い

赤門学友会より教職員の方々にお知らせします。  
皆さまのご協力をお待ちしています。

### 1. 卒業後10年、20年、30年、40年の教職員の方 —ホームカミングデイ周年幹事のお願い—

第11回ホームカミングデイ（10月20日開催）のイベントとして「卒業〇周年学年会」を開催します。入学から卒業まで、共に学生生活を送った同期生が久しぶりに再会します。周年幹事としてご協力いただける方は、ぜひ事務局までご連絡ください。詳細→「東大卒業30周年(20周年)学年会」で検索

### 2. 各県の高校出身の教職員による新入学生激励会

地方出身の新入生は、不慣れな東京暮らしと友人の少ない学校環境にストレスを感じています。昔は盛んであった同郷の先輩方による新入生歓迎会を開催し、学生たちを励ましたいと思います。ご協力いただける教職員は事務局にご連絡ください。詳細→ <http://www.todai-alumni.jp/>

#### 問い合わせ先

赤門学友会事務局  
TEL：03-5841-1249 内線21249  
E-mail：gakuyukai@adm.u-tokyo.ac.jp

## — 特集テーマ&執筆部署募集告知 —

# 特集の記事を 執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

### 1. 制作方法

#### ① テーマの選定

全学の教職員を读者対象とするテーマを選定することにしています。まずは、本部広報課に気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。  
(締切日の1カ月前位までに一度ご相談ください)

#### ② 内容・構成の決定

テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

#### ③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はWordファイルでご制作下さい。

#### ④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。

(学外または他部署のホームページ等から写真・図・イラスト等を転用する場合は著作権に十分留意し、必ず先方の許諾を得てからご使用ください)

#### ⑤ デザイン

お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていたとしてもかまいません。

#### ⑥ 校正

デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。

#### ⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

### 2. 締切日

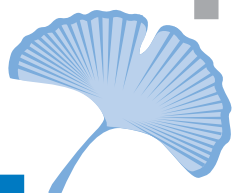
あらかじめ、こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日の数日前を原稿締切日とします。

### 3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム  
TEL：03-3811-3393 内線：82032  
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



# キャンパス ニュース



キャンパス

本部入試課

平成 24 年度入学者数決まる

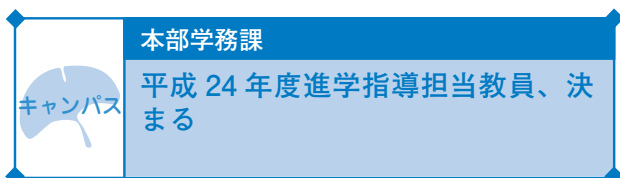
平成 24 年度入学者数は、次のとおりである。

科 類	入学定員	合 格 者 数			入 学 辞 退 者 数	入 学 者 数		留 学 生 の 入 学 者 数		入 学 者 総 数
		一般入試	特別選考 (第 2 種)	合 計		前 期 等	後 期	国 費 留 学 生 等	特 別 選 考 (第 1 種)	
文科一類	2,963 (2,963)	401 (401)	6 (7)	407 (408)	0 (1)	407 (440)	38	2 (1)	1 (0)	448 (441)
文科二類		353 (353)	5 (7)	358 (360)	0 (0)	358 (365)	2	2 (2)	6 (5)	368 (372)
文科三類		479 (479)	2 (3)	481 (482)	1 (1)	480 (487)	3	7 (3)	3 (1)	493 (491)
理科一類		1,128 (1,128)	3 (4)	1,131 (1,132)	4 (3)	1,127 (1,166)	37	10 (18)	5 (4)	1,179 (1,188)
理科二類		547 (548)	1 (3)	548 (551)	4 (7)	544 (561)	17	2 (2)	3 (3)	566 (566)
理科三類		100 (100)	0 (0)	100 (100)	1 (0)	99 (100)		0 (0)	0 (0)	99 (100)
全 科 類	100 (100)	100 (102)		100 (102)	3 (4)					
合 計	3,063 (3,063)	3,108 (3,111)	17 (24)	3,125 (3,135)	13 (16)	3,015 (3,119)	97	23 (26)	18 (13)	3,153 (3,158)

(注) 1. ( ) 内は、昨年度を示す。

2. 国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工系学部留学生を含む。





教養学部（前期課程）から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導や相談にあたる今年度の進学指導担当教員は、次のとおりである。

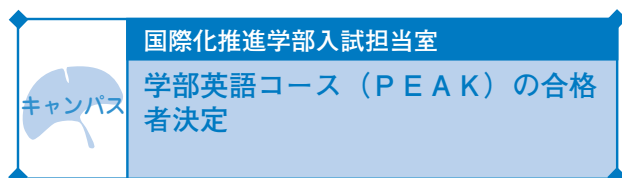
平成24年度進学指導担当教員名簿

平成24年5月現在

学部		職名	氏名	Email (*は@に置き換え)	電話	
法	全類	教授	日比野 勤		03-5841-3257	
医	医学科	教授	黒川 峰夫		03-5841-3159	
	健康総合科学科	准教授	上別府 圭子		03-5841-3555	
工	社会基盤学科	准教授	田島 芳満	yoshitaji *coastal.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6111	
	建築学科	准教授	大月 敏雄	bigmoon *arch.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6169	
	都市工学科	准教授	瀬田 史彦	seta *urban.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-0232	
	機械工学科	教授	鈴木 雄二	ysuzuki *mesl.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6411	
	機械情報工学科	教授	下山 勲	isao *i.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6317	
	精密工学科	教授	佐々木 健	ksasaki *k.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6452	
	航空宇宙工学科	教授	堀 浩一	hori *acm.org	03-5841-6601	
	電子情報・電気電子工学科	教授	森川 博之	mori *mlab.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6726	
	物理工学科	教授	岩佐 義宏	iwasa *ap.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6828	
	計数工学科	教授	杉原 正顯	m_sugihara *mist.i.u-tokyo.ac.jp	03-5841-6955	
	システム創成学科	准教授	長谷川 秀一	hasegawa *sys.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-7011	
	マテリアル工学科 A コース	教授	高井 まどか	takai *mpc.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-7125	
	マテリアル工学科 B コース	教授	小関 敏彦	koseki *material.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-7110	
	マテリアル工学科 C コース	教授	近藤 高志	tkondo *castle.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-7093	
	応用化学科	講師	堀場 弘司	horiba *sr.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-7191	
	化学システム工学科	准教授	菊地 隆司	rkikuchi *chemsys.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-1167	
	化学生命工学科	教授	加藤 隆史	kato *chiral.t.u-tokyo.ac.jp	03-5841-7440	
	文	文学部全学科	教授	白波瀬 佐和子	sshiraha *l.u-tokyo.ac.jp	03-5841-3879
理	数学科	准教授	今野 宏	konno *ms.u-tokyo.ac.jp	03-5454-8321	
	情報科学科	教授	今井 浩	imai *is.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4117	
	物理学科	教授	宮下 精二	miyashita *phys.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4192	
	天文学科	教授	柴橋 博資	shibahashi *astron.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4256	
	地球惑星物理学科	教授	杉浦 直治	sugiura *eps.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4307	
	地球惑星環境学科	教授	木村 学	gaku *eps.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4510	
	化学科	教授	西原 寛	nisihara *chem.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4346	
	生物化学科	教授	深田 吉孝	sfukada *mailecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4381	
	生物学科	生物学科	准教授	越田 澄人	koshida *biol.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4433
			准教授	上田 貴志	tueda *biol.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4471
			講師	井原 泰雄	iharay *biol.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4483
	生物学科	教授	平野 博之	hyhirano *biol.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4056	
生物情報科学科	准教授	有田 正規	arita *bi.s.u-tokyo.ac.jp	03-5841-0764		



農	生命化学・工学専修	准教授	中 嶋 正 敏	nkjm * pgrl.ch.a.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5192
		准教授	伏 信 進 矢	asfushi * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5151
	応用生物学専修	准教授	経 塚 淳 子		03-5841-5465
	森林生物科学専修	准教授	小 野 良 平	ono * fr.a.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5208
	水圏生命科学専修	准教授	潮 秀 樹	aushio * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5299
	動物生命システム科学専修	准教授	杉 浦 幸 二	aks * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5195
	生物素材化学専修	准教授	五十嵐 圭日子	aquarius * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5258
	緑地環境学専修	准教授	大 黒 俊 哉	aokuro * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5049
	森林環境資源科学専修	教 授	酒 井 秀 夫	sakaih * fr.a.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5215
	水圏生産環境科学専修	准教授	良 永 知 義	atyoshi * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5284
	木質構造科学専修	准教授	稲 山 正 弘	ainayama * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5253
	生物・環境工学専修	教 授	富士原 和 宏		03-5841-5354
	農業・資源経済学専修	教 授	松 本 武 祝	amat * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5841-5321
	フィールド科学専修	准教授	吉 田 薫		03-5841-7557
	経	全学科 (経済学科、経営学科、金融学科)	教 授	福 田 慎 一	sfukuda * e.u-tokyo.ac.jp
教 授			今 橋 映 子	hikaku * fusehime.c.u-tokyo.ac.jp	03-5454-6390
養	学際科学科	教 授	開 一 夫	khiraki * idea.c.u-tokyo.ac.jp	03-5454-6994
		教 授	前 田 京 剛	cmaeda * mail.ecc.u-tokyo.ac.jp	03-5454-6747
育	総合教育科学科	教 授	山 本 清	ykiyoshi * p.u-tokyo.ac.jp	03-5841-1236
薬	全学科	教 授	新 井 洋 由	harai * mol.f.u-tokyo.ac.jp	03-5841-4720



本年10月から英語による授業のみで学位が取得できる学部英語コース (PEAK) を教養学部を設置する。学部英語コース特別選考により、合格者38人を決定し、合格者には、4月25日 (水) に通知した。なお、志願者数、合格者数及び国籍は、次のとおりである。

平成24年度学部英語コース特別選考結果

	志願者数	合格者数
国際日本研究コース	115	16
国際環境学コース	123	22
合 計	238	38

日本	4人
韓国	6人*
シンガポール	7人*
台湾	2人
中国	7人
パキスタン	1人
ベトナム	2人
オーストラリア	2人
ニュージーランド	1人
アメリカ	2人*
イギリス	1人
ドイツ	1人*
フィンランド	1人*
ポーランド	1人
合 計	38人

注：\*印は日本との二重国籍者1名含む。



# プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム 《実践編》 #03

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きる。ともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターがある岩手県大槌町は、町長が、そして多くの役場職員が3.11の津波によって亡くなりました。そのため、震災後は行政機能に過度の負担がかかり、復興への道筋を示すことがきわめて困難な状況が続きました。「大槌町復興支援プロジェクト」では、多様な専門家によるチームを結成し、そのような状況下にある大槌の町を支援してきました。学生らとともに被災地に寄り添い、被災調査、復興計画立案、その実践まで、幅広い支援を続けてきたのです。そこで、今回はプロジェクトの共同代表者である中井祐教授（工学系研究科社会基盤学専攻）にお話をうかがいました。



## プロジェクト名：大槌町復興支援

**広報課** まず、中井先生が大槌町の復興支援に携わることになったきっかけを教えてください。

**中井** 震災後、土木学会震災調査団の幹事長として被災地調査を行っていた折、岩手県から依頼があり、大槌町に支援専門家として関わることになりました。さらに、国交省都市局が復興基本計画のための調査を行う際に、大槌担当の技術アドバイザーとして検討業務に加わることになりました。その後、大槌町の復興委員会が結成され、委員として参加することになりました。つまり、国、県、町と複数のルートで大槌に関わっていったわけです。

**広報課** 昨年7月、大槌で屋台居酒屋をつくってメディアにも注目されましたね。

**中井** 屋台プロジェクトは行政からの依頼ではなく、私の研究室を中心とした東大チームの自主的な活動として行いました（写真参照）。住民の方々が元気になる、希望が持てるような、また、集まって語り合えるような「住民のための場」を作ろうと思ったんです。この屋台プロジェクトを含め、8月くらいまでは、研究室の尾崎信助教、都市工学専攻の窪田亜矢准教授と黒瀬武史助教、国際沿岸海洋研究センターの大竹二雄センター長、生産技術研究所の川添善行講師と「大槌のために何ができるか」を考えたり、そのための調査をしたりしていました。「大学の動きと行政の動きを繋げるにはどうすればよいか」ということをずいぶん話し合

いました。さきほど言ったように、行政側からの依頼が多かったので、私は、おのずと「大学と行政の接点」に座らざるを得なかったんですね。なんとか、この2つが連動する形にもっていきたいと考えていました。

**広報課** 9月に大槌の新町長が選出されて、復興への流れができましたね。

**中井** ええ、新しい町長さんから「地区毎に復興協議会を発足して、毎週住民主体で議論して復興計画をつくりあげたい」と相談されました。「大変な役目だなあ・・・」と思いつつ、その議論のコーディネーター役をお引き受けして、私や窪田先生（前出）を始め、研究者7人がほぼ隔週ペースで大槌に足を運び、住民の議論をまとめあげていきました。

**広報課** 復興支援活動をするうえで意識していることなど、ありますか？

**中井** 第一に、「現場（市民・行政）と大学の連動」ですね。いまは、私自身が連動のターミナルのような機能を果たすように意識して動いています。それから研究者という人種は、つい原理原則や机上の一般論をふりかざしがちですが、復興という非常時の現場ではあまり役にたちません。とくに、私の専門である社会基盤学は現場で考え、判断して、状況を動かしてなんぼの分野ですから、常に現場で感じて議論して、ということを意識しています。自分のなかに築かれている既存の観念的価値体系を過信せず、虚心坦懐に現場に向き合う。それからもうひとつ、「無

私無欲で活動すること」もとても大切です。ときどき、この際被災地でぜひこのテーマを実現したい、というような言い方をする研究者に会うと、とても強い違和感を覚えます。ようするにこれで研究費もとれるし業績にもなる、というのが本音なのでしょう。被災者や被災地は学者のための研究対象ではありません。研究職にある医師だって、目の前の瀕死の重傷をおった患者を業績の対象として扱えば倫理的に問題でしょう。そもそも無私無欲でなければ住民にも行政にも信頼されませんし。

**広報課** 大学の研究者だからこそできる復興支援のかたちもありますよね。

**中井** 大学人は他の職種に比べて圧倒的に、自由に考え、自由に行動することが保証されています。たとえば私がやっている役割は民間の専門家でも能力的にできる人はいると思います。しかし、民間企業はそれを受注者という立場で仕事として受けてしかも単年度でやらなければならない。あるいは個人としてやりたいくとも、収入と肩書きを捨てて会社を辞めないと自由に動けない。いまの社会制度では、専門家が持続的効果的に復興支援に取り組むことが難しいんです。今回の震災のような非常時には、そういう日常時には隠れている「社会の穴」が顕在化して復興の行く手を阻むわけですね。その穴を埋めるのが、自由に考え動ける大学の専門家の役割なのかもしれません。そんな考え方をしつつ、これからも支援を続けていきたいと思っています。



写真左から【1】2011年7月24日、被災の痕跡はまだ生々しい廃墟のなかに赤提灯の灯がともる。中井教授の景観研究室が中心となって被災した居酒屋夫婦を助け、デザイナー南雲勝志氏の助力と町民の協力のもと、ちいさな屋台広場ができあがった。復興への希望の灯。

【2】屋台オープニングの集合写真。水色のエプロンの店主夫婦を囲むように、前方に地元の方々、後方には東大の教員と学生たち。左端が中井教授、右端が窪田准教授（都市工学専攻）、赤提灯の左隣が川添善行講師（建築学専攻）。

【3】自らも被災しながら屋台製作のための木材を無償で提供してくださった地元の製材所に、東大を勝手に代表して、後日中井教授が手づくりの感謝状を贈る。

プロジェクトに関する問い合わせ  
大学院工学系研究科 社会基盤学専攻 中井 祐  
構成：本部広報課（内線：82032）



# ひょうたん島通信

第5回

大槌発！

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱（ほうらい）島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から毎月、沿岸センターと大槌町の復興の様子をお届けします。



## かわベコラム拡大版です！

国際沿岸海洋研究センター専門職員・川辺幸一です。2月から大槌町勤務に戻りました。釜石市から提供を受けた仮設住宅に住み、そこから大槌町中央公民館内にある復興準備室に通勤しています。「ひょうたん島通信」が早くも連載5回目を迎えた記念として、今回は「かわベコラム」拡大版をお送りします。

## 被災地の子どもたち

— 終わりなき旅 I Still Haven't Found What I'm Looking For —

仮設住宅での生活で体が鈍らないよう、時間がある時には被災地をジョギングしています。そんな時、学校の部活帰りなのか、何人かの子どもたちとすれ違うことがあります。彼らは見ず知らずの私に対し、「こんにちは」と礼儀正しく挨拶をしてくれます。  
岩手に遅い春が訪れ、ようやく桜が咲き始めた4月下旬。大槌町の小中学校仮設校舎を訪れました。ここは震災により使用できなくなった大槌小学校、安渡小学校、赤浜小学校、大槌北小学校、大槌中学校の計5校が合同で利用している校舎です。町の中心部から山側に遠く離れた不便な立地にあるこの校舎への登下校は

親御さんによる送迎、もしくは町を巡回するスクールバスを利用しているとのこと。そんな厳しい生活環境にも負けず、休み時間に校舎から飛び出してきた子どもたちは笑い声とともに元気いっぱい校庭を飛び回っていました。沿岸センターで私と一緒に働いている短時間雇用職員の伊藤弘恵さんも津波で自宅を失った被災者のひとりです。現在は釜石市の仮設住宅から大槌町の復興準備室に通勤されています。伊藤さんには3人のお子さんがいらっしゃいます。震災前には自宅の子ども部屋で兄弟別々に勉強をしていたそうですが、仮設住宅ではそうもいかず、狭い一室で生活時間の違

う兄弟が「明かりが眩しくて眠れない(弟)」、「試験があるんだからガマンしろ(兄)」というようなやり取りを毎日しているとのこと。家族全員ストレスのたまる生活が続いているそうです。一見すると元気いっぱいである被災地の子どもたちですが、彼らは多感な時期に未曾有の大地震と大津波を経験しました。多くの子が家や学校を失い、家族や友達を亡くしたりと想像を絶する数多くの悲しい出来事に遭遇したに違いありません。そんな被災地の子どもたちを思うと、ひとりの親として未来に幸あれと願わずにはられないのです。



5つの学校が集う仮設校舎



授業風景

大槌町立 小学校-中学校仮設校舎
大槌町立 大槌小学校
大槌町立 安渡小学校
大槌町立 赤浜小学校
大槌町立 大槌北小学校
大槌町立 大槌中学校

大槌小学校	197名
安渡小学校	34名
赤浜小学校	18名
大槌北小学校	188名
大槌中学校	269名
計	706名

仮設校舎に通う生徒数



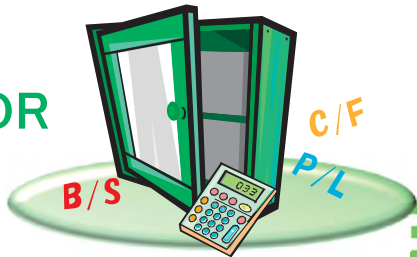
廊下にはられた全国からのメッセージ



仮設校舎グラウンドで元気に遊ぶ子どもたち

# 決算のDOOR

～数字が語る  
東京大学



## 第20回 大学も困っています！

拝啓、〇〇様

風薫る新緑の季節になりましたが、お変わりなくお過ごしでしょうか。満開の桜の中新入生を迎え、一時華やいだキャンパスもすっかり落ち着きを取り戻し、勉強やサークル活動に精を出す学生、授業や研究に勤しむ教員たちいつもの光景が戻ってまいりました。そんな日常風景の向こうに時折不気味に漂う暗雲、ええ、消費税率の引き上げ問題です。

これまでも、あがる、いやいやあがらないと俎上に載せられては消えていた増税問題。すっかり対岸の火事と思っていたところ、俄かに現実味を帯びてきました。「自民公約『消費税10%』衆院選向け原案に明記」(産経新聞4月10日)「消費増税、24日審議入りめざす…政府・民主党」(読売新聞4月19日)…ニュースや新聞の見出しからも窺えますが、政府が2年後の2014年4月に8%、翌15年に10%と2段階での引き上げを提示しているのはご存知ですよね。

消費税と大学の関係ですか？ええ、ええ、もちろん！ほら、いつもお買い物で払っているじゃないですか。教育や研究のために使用する書籍代、出張旅費(国内)、実験器具の代金、建物整備の費用、電気代や水道代にだって、消費税5%は含まれます。一般にお店などでは、仕入れの時に支払った消費税は、商品を買った時に回収できます。84円(内税4円)で仕入れた商品を105円(内税5円)で売る場合、たとえ税率が倍になり仕入値が88円(内税8円)になったとしても、売値を110円と消費税分10円を上乗せすることで元が取れます(差額の消費税2円は税務署へ)。これは小売業だけでなく仕入れた材料を加工、制作、販売する製造業や、運輸、通信、サービス業などの企業もみな同じ。消費税率が上がっても会計上は影響はありません。

ところが大学はそうはいきません。その理由はお買い物の元手(収入)。実は大学のほとんどの収入には消費税が含まれていません。年間約2000億円程の大学の収入のうち、消費税が含まれているのは受託研究収入や建物の貸付料、ライセンス収入などわずか2割程。残りの8割にあたる自己収入(授業料収入、診療収入、寄附金)や運営費交付金や補助金には消費税が含まれていないのです。その8割を元手にお買い物をすれば、消費税分は当然大学の自己負担！これまで525万円で購入していた電子顕微鏡が、550万円になったら差額の25万円はどこから融通しなくてはなりません。お店や企業と異なり、大学は私たち消費者と同じ立場に置かれているのです。

もちろん、大学も教育研究の質をこれまでどおりに維持するため、財源確保の検討を進めていますが、なかなか解決には至っていません。ねっ？消費税増税は大学にも、とても重たい問題でしょ？だから、お願いです。何か妙案があれば是非とも教えていただきたいのです。(青)



(東京新聞24年3月30日)

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取ることがあります。あらかじめご了承ください。一ご意見、ご質問お待ちしております！

# インタープリターズ・ バイブル

vol. 58



科学技術インタープリター養成プログラム

初夏の教室から

山邊 昭則

教養学部附属教養教育高度化機構 特任講師

キャンパスの新しい名所21KOMCEEで今学期も全学ゼミを開講している。今の季節、広い窓ガラスに映る眩しい新緑が建物を一層彩る。建造の際には隣接の大きな楠も大切に残されたと聞く。教室は、多目的に機能するテーブル、壁全体がホワイトボードとして活用できるなど、学生の主体的な学びを促す工夫が凝らされている。階下のカフェも、学内外の皆さんとの親睦に相応しい開放的な空間となっている。

駒場は様々な学問との出会いに溢れる、いわばレバラーアーツが花開くキャンパスである。他方で、学術の基礎を固める大切な時期でもあるため、前期課程の場合、科類を超えた相互学習の機会は必ずしも多くないことをこれまで聞いてきた。同じ志向の仲間同士で学ぶ環境も大切であるが、その学生たちの生の声のなかに、取り組むべき新たな課題も少し感じていた。

そうしたなか、昨年度から、科学技術と社会の問題を主題とし、「新しい時代の新しい教養」という副題で、やや裾野の広がりを意識したゼミを始めた。すると、文ⅠⅡⅢ、理ⅠⅡⅢすべての科類の学生が集まる授業となった。今学期は170名の希望者があり、申し訳ない気持ちとともに選抜を行った。ご縁が実らなかった皆さんとは、また機会があればと心から願う。いずれにしても、科類を超えた学び合いが、このゼミの上位の価値となっている。

それには比較的分かりやすい理由があって、今日の社会問題の多くが複合的要因で構成され、一つの学術分野では解決が困難であること、実働のフェーズでも、異分野の連携がほぼ必須だからである。環境の保全、震災からの復興、市民を交えての政策立案、先端技術の社会への応用、どれをとってみても。そうした社会の現実を考慮すると、どの専門や職種へ進もうとも、異なる学術的・職業的志向を持つクラスメイトが、どのような価値観や考え方の枠組みを持つ傾向があり、いかなる知・技・態を備えれば、やがて実社会で効果的に協働できるのか、感覚的にでも知っておくことは、長い目で見てやはり重要と思われる。新たな発想の契機ともなるかもしれない。

欧米で浸透しつつある医療者教育に、インタープロフェッショナル・エデュケーションというものがある。様々な医療専門職を目指す者が、「学習者の段階で」異なる専門の仲間と同じテーブルを囲み、議論を行い、多職種連携能力の基礎が培われた状態で、臨床の職務を開始できるように方向づけしたアプローチである。既に豊富なエビデンスを有する集学的医療・チーム医療など、現場のニーズに応じて、合理性を伴い、従来の縦割りの教育文化が改革された良い例である。

同様のことが科学技術に関わる教育でも求められているのではないだろうか。このゼミが、そうした感性を磨きさやかな機会として、新しい時代のレバラーアーツに寄与できればと願っている。筆者もまた学習者の一人として。

★科学技術インタープリター養成プログラム  
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>





# Crossroad ~産学連携本部だより~ Vol. 78

Crossroadとは、産業界と大学がクロスする場所の意味をこめます



経済不安をはじめ、転職の常習化などから、企業不信や雇用不安といった傾向もある中、価値観の多様化とともに、人生を選択するコースも多様化し、社会の問題や起業に関心を持つ学生が増えつつあります。今号からスタートする「SanRen 対談」は、産学連携に関するテーマで対談していただく新企画。記念すべき初回は、事業化推進部部長の各務茂夫教授と、(株)東京大学エッジキャピタル(UTEC)の郷治友孝社長にご登場いただきます。



各務 茂夫教授

## アントレプレナー道場のいま

アントレ道場は今年で8年目になるわけですが、本質的には会社を創るための教育ではなくて、問題を発見して定義し、解決し、時には少し力づくでも解決できる胆力を持てるような、訓練をする場と捉えています。それはあたかも、誰もが水泳を学ぶのに似て、一度体得したものは一生モノになるということです。学生にはぜひ、溺れることを恐れずにチャレンジしてほしいと思いますね。

40~50人の道場卒業生が実際に起業したり、ベンチャーに関わっています。学生の考え方もずいぶん変わってきて、大企業や役所への就職、そしてベンチャーを起業する選択肢の中で、自分が選択したリターンに対するペイオフマトリックスが変わりつつあるようにも感じますね。

実際に起業した道場卒業生がもうそんなにいて、問題意識を叩きこまれて卒業していく学生も出てきているようで、非常に意義深いものに発展させておられますね。



郷治 友孝社長

## ロールモデル

郷治社長がベンチャーキャピタリストとして手掛けられた(株)メルフォの平賀督基社長は、大学で博士号を修了した後、2年ほど武者修行して起業され、その後、立派な経営者になって、昨年7月に上場しました。同じく、今年の3月に上場したライフネット生命保険の岩瀬大輔副社長は、マスコミに対するエクスポージャーが高い。彼らのようなロールモデルが実際にできつつある中で、学生の意識も変わっていくんじゃないかなと思いますね。

当社が投資を通じて起業を応援している企業で、ウェブ情報統合サービスを開発・提供するpopln(株)は現在、50社ほどニュースメディアを顧客として獲得するまでに成長していますが、起業して初めて理解できることが多かったようです。成長を感じますね。

当社の投資も今後、道場卒業生の起業支援につながっていく可能性があるかもしれないと思いますね。学生のうちにすぐ起業するのがベストかという、IT系などを除いては難しい面もあるので、人生の中長期的なプランの中で、自分の人生の中に起業をどう位置付けていくかが大切かなと思います。

## SanRen 対談

## ベンチャーを目指す学生たち

### 超高成長体験がベンチャーマインドを育む



グリー(株)の田中良和社長に以前、創業した理由を聞いたとき、楽天(株)にいたときの経験が大きいですよね。田中社長は1977年の生まれで、高校生くらいから、失われた20年といわれる閉塞感がある時代の中でずっと過ごしてきたわけですが、起業には「超高成長」を経験するのが重要なんだというんです。混沌と夢がミックスしたような世界で、熱いモノに取りつかれたような感覚ですね。実は、高成長の体験というのはベンチャーを育むうえですごく重要なんです。会社を創ることに一種、独特の魅力を感じるんですね。

入学式の挨拶で濱田総長が学生に向けて、「タフであれ」とおっしゃっていましたが、ある意味においては、少し現実的に経済性も含めて帳尻合わせが効くようなことをし、現実の問題を見て観察してといった、原体験みたいなものがすごく重要です。すべてにストラクチャーがあってやっているわけではなくて、朝令暮改もいいところで、そうはいつでも前に進まなきゃいけない。でも全体につながっていくような通奏低音の物事の考え方とか、それがビジョンとして提示されている会社がいかに成長していくのか、そういう経験を学生ができるっていいかなと。

## 続きはWebで

## 起業家が社会を変革する

資本主義って起業家が資本のリスクをとるんじゃないかって、資本家にとってもらうのが本来、正しいはずなんですよ。

先日、文科省が平成24年から開始する「大学発新産業創出拠点プロジェクト」の事業プロモーターに選ばれたのですが、このプロジェクトは大学発ベンチャーの起業前の段階から政府資金と民間の事業化ノウハウなどを組み合わせることで、リスクは高いけれどもポテンシャルの高いシーズの事業化を目指すものです。創業以来、基礎研究の早い段階から研究者とコラボレーションし、会社を創り、事業化して売り上げを立て、売り上げを伸ばすところまで面倒を見てきた、当社の事業育成モデルを広げていくことが期待されたのだらうと思います。



Shigeo Kagami

グーグルの2人の創業者をはじめ、学生が起こしたベンチャーが世の中を変えているのは事実で、東大の学生にできないわけではないんです。新しい日本をベンチャーでと思っている若者が多く、それを力に変えていきたいですね。

Tomotaka Goji

ベンチャー企業のリスクを軽減し、マーケット形成する活動を成功させたいですね。新しいリアルベンチャーというか、難しい付加価値の創出にチャレンジする成功事例も、もうすぐできてくる予定です。



連絡先：産学連携本部（本部産学連携課）  
電話：内線22857（外線03-5841-2857）  
WEBサイト：<http://www.ducr-u-tokyo.ac.jp/>

SanRen  検索



このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

国際ワークショップ

## 医療イノベーションと ハーモナイゼーション

医療イノベーションにおけるハーモナイゼーションの意味を再確認し、わが国で取り組むべき課題についてより明らかにすることを目的とした国際ワークショップが4月13日、開催されました。

今回、基調講演をお願いしたマイケル・グロップ氏（Global Harmonization Task Force, GHTF 設立委員）によれば、医療分野における規制のハーモナイゼーションとは、各国でさまざまに異なる薬事などの法的規制あるいはガイドライン等に対し、共通の基準と規制手段を設定、認証、そして導入することです。これは、知的な資源のプールとシェアをめざしており、研究開発投資や満たされていない臨床および公衆衛生上のニーズを解消するイノベーションを促進するものでもあります。

このようなイノベーションは、先進国だけでなく、発展途上の国々の医療上のニーズを持続的に満たしてゆくために重要です。医療分野では、より安全で有効な質の高い技術を臨床現場に届けるために、世界各国でさまざまな規制がおこなわれていますが、経済統合や自由な通商が進めば、技術的な面での規制のハーモナイゼーションが必要

になります。同時に、規制者が増えれば、規制者の協力や情報の交換が生じます。

グロップ氏は、マーケットの拡大に応じて追加的にかかる法令遵守のためのコストをできる限り小さくすることでイノベーションを促進できれば、満たされていない



Mr. Michael Gropp  
 (GHTF 設立委員)

臨床および公衆衛生上のニーズの解消にもつながるし、持続的な社会の発展をもたらすことにもなるのではないかと問いかけてきました。

パネルディスカッションでは、林良造客員教授（公共政策大学院）をモデレータとして、松本洋一郎教授（理事・副学長、内閣官房医療イノベーション推進室長）をはじめとする専門家が議論しました。そこでは、規制のハーモナイゼーションに加えて、特許や保険制度も、医療イノベーションを進める上で極めて重要であることが確認されました。主な話題には、医療技術ごとの違い、とりわけ医薬品と医療機器の違いに応じたイノベーション推進のあり方、薬事のみならず、知財、保険償還まで含めたハーモナイゼーションの議論の必要性、自発的

な規制の収斂の一例やその難しさ、ハーモナイゼーションの前提となる規制の透明性、医療技術に関する情報提供やリスクコミュニケーション、研究開発投資の促進などが含まれています。城山英明教授（政策ビジョン研究センター長）は、規制のハーモナイゼーションが進みやすい領域、ハーモナイゼーション推進の枠組みが幾つもあることの弊害、安全性のレベルを下げることなく規制コストを下げる手法、医療技術の消費が拡大する発展途上国から規制上の費用を負担してもらう可能性などについて、発言しました。

今回の国際ワークショップでは、規制のハーモナイゼーションについて、研究開発投資を通じて、より優れた医療技術をより多くの人々に届けて、満たされていない医療上のニーズを解消するというイノベーションを促進するものであることを確認しました。わが国で進められている医療イノベーションでは、世界最高水準の医療を国民に提供するとともに、医療関連分野を成長産業に育成することが目標に掲げられています。政策ビジョン研究センターでは、今回を皮切りに、世界で最も早く高齢化を迎える我が国において、今後、持続的な経済成長と健康長寿社会を実現するための基礎的な研究と発信を続けて参ります。

（佐藤智晶 特任助教）

## アジアのエネルギー その課題と展望

アジアは世界のエネルギー政策の中心であり、その動向は世界に直接的な影響を与えている。中国はもちろんのこと、今後世界一の人口大国になると予想されるインドにつき、ASEAN（東南アジア諸国連合）も経済成長が著しい。今後25年間で世界の一次エネルギー需要の増分のうち、3分の2を占めるのがアジアであるとの予測は、第1回のラウンドテーブルでも示されたが、これはアジアが世界のエネルギー需要を牽引することを示す象徴的な数字である。

エネルギー問題は本質的にグローバルである。風が吹けば桶屋が儲かるではないが、例えば、自動車産業で世界最大のマーケットである中国のガソリン需要は、世界の原油需給

の将来を左右する。これに付随して、二酸化炭素排出規制や電気自動車導入等、エネルギー・環境問題に対する中国の取り組みが、各国の産業政策をリードし、結果として世界経済に影響を与えることは想像に難くないだろう。既に多くの分野で中国は世界最大の市場であり、エネルギー調達に関しても多様な選択肢を持ち始めている。

このような中、日本がアジアでのプレゼンスを保つためには、中国・インドの間に位置し、歴史的にも経済的にも近い関係にあるASEANの安定と成長に寄与するとの視点がますます重要である。シンガポール国立大学エネルギー研究所のChou Siaw Kiang 所長による第2回エネルギー政策ラウンドテーブルの基調講演では、ASEANのエネルギーの現状と展望、さらに直面する課題等について、いわば「内側から見たASEANの全体像」について講演が

あったが、同所長も言うとおり、ASEANは多様性を内包する。加盟国間、あるいは地方と都市とで電化率に大きな格差があり、エネルギー貧困問題に直面している側面もある。しかしながらこれは、域内に絶えず大きな発展の余地を有するフロンティアを抱えているということでもある。ここにASEANの多様性をダイナミズムに変換していく知恵と努力が求められる。そのためにまず対話が必要であるが、これを促進する人材の育成や制度、技術、統計等のソフトインフラ面の整備に関しては、まさに日本が協力と貢献のできる分野であり、実際期待も大きい。日本としてもASEAN域内外の対話をリードすることで、アジアの活力と成長エネルギーを内に取り込める余地があると言えるだろう。

（芳川恒志特任教授）

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>



## Asian Diversity No.19 by ASNET 復興支援ツーリズム

東日本大震災からの復興に私たちはどう関わるべきなのだろうか。復興支援ツーリズムは、多くの人が参加できる支援の方法として考えられています。東洋文化研究所・ASNET共催セミナーでは、石巻専修大学の森信治郎氏をお招きし、その可能性についてお話いただきました。

大森先生は、東日本大震災の大津波から大きな被害を受けた宮城県石巻市で、専門分野のツーリズムの立場から復興に関わってこられました。被災直後の緊張感が薄れるにつれ、被災者の要求は多様化し、来訪者（ボランティア）の意識も多様化していきます。より多くのボランティアが被災地に訪れるようにするために、観光とボランティア活動を組み合わせた「ボランティア・ツーリズム」は有効な方法だと考えられています。また、観光客を呼び込むことは地域経済の活性化にとっても重要な意味を持ってきます。雇用を生み出し、産業を復興するためには観光客が現地でお金を使うことは重要なことです。ただし、震災の記憶を忘れないために、訪問者が弔意を表す場を整備するような配慮も必要でしょう。また防災研修のような形で、震災の教訓を生かす仕組みも重要でしょう。

観光客として現地を訪れることは、現地の事情を知るということにつながります。新聞やテレビでは報道されない事実も、現地に行くことによって知ることができ、それは復興を正しい形（正義に合った形）で導くこととなります。この点は、第41回共催セミナー「アマルティア・センの『正義のアイデア』」（2011年12月1日）で取り上げたことに関わってきます。特に福島で現実起こっている状況は注目していく必要があります。

原発に依存する開発の形が望ましいのかという点に関しては、第43・44回の共催セミナーで「ドキュメンタリー映画を見る」として「懐かしい未来：ラダックから学ぶ」（2012年1月26日）と「それでも種をまく」（2012年2月9日）として取り上げました。これらの共催セミナーの内容についてはASNETのホームページで「ASNETの活動報告」として見ることができます。ぜひご覧ください。

共催セミナーでは、今後も震災復興に関わるテーマを取り上げていきたいと思えます。 文：池本幸生



大森信治郎氏(石巻専修大学経営学部)による講演

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

## ～救援・復興支援室より～

No.12

### ■救援・復興支援室の活動（4月～7月）

- 4月27日・・・登録プロジェクトに対する支援プロジェクト決定
- 4月28日～5月5日・・・ゴールデンウィークボランティア隊活動  
活動場所：岩手県大槌町及び陸前高田市  
第1班：4月28日～5月1日  
第2班：5月2日～5月5日
- 5月1日・・・波江町と放射性物質による汚染の測定及び除染の連携・協力に関する協定締結
- 5月26日～7月8日・・・学習支援ボランティアの活動予定  
活動場所：岩手県陸前高田市  
活動期間：5月26・27日／6月9・10日  
6月23・24日／7月7・8日

- プロジェクト登録研究 85件（2012年3月21日現在）  
⇒「再生のアカデミズム《実践編》」連載中。P24参照
- 救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。  
[http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/index\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/index_j.html)
- 救援・復興支援室  
Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
内線: 21750

### 第3話 分室

救援・復興支援室の遠野分室から、被災地の復興の様子や分室の活動を報告していきます。

### 遠野ものがたり

「許可証」の更新を済ませてきました！  
遠野市で活動していて、何処でも必ず目にする存在・「カッパ」。カッパは日本全国から情報が寄せられるUMA（未確認生物）ですが、その中でも有名なもののひとつが、ここ遠野市の「カッパ淵」に現れるといわれています。

遠野市のキャラクターにもなっており、生け捕りと帰属が条件で地元遠野テレビが「1,000万円」の謝礼金を懸けており、カッパ淵の様子はライブでHPから見る事ができます。

但し、運よくカッパに遭遇しても、これを持っていないと・「カッパ捕獲許可証」。

遠野市観光協会が発行していて、顔写真入りや名刺にしている遠野市民もいます。裏面には「カッパ捕獲7カ条」が記載されており、遠野市のカッパに対する愛情が伝わってくる許可証です。ちなみに、週末カッパ淵で許可証を提示すると、「キュウリ付きの釣竿」を無償で貸してくれます。

許可期限が過ぎている方は、早目の更新をお勧めします。

どんどはれ・

文：赤崎公一



カッパ捕獲許可証



カッパ淵の様子



遠野市キャラクター「カリンちゃん」

執筆者紹介： 救援・復興支援室遠野分室勤務（総合企画部企画課係長）赤崎公一氏。東日本大震災にて実家（岩手県大槌町）が津波で全壊し、家屋・家財すべて流失。昨年7月より、妻と子（当時1歳）とマンションのローンを東京に残し、岩手県遠野市に移住。現在は、被災した母（65歳）と高校卒業以来の同居生活中。  
連絡先: tohno-kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

## コミュニケーションセンターだより No.88

### ■6月17日は父の日！

#### 御酒・乾杯式アミノ酸はいかがでしょうか？

みなさんこんにちは！母の日は楽しくすごせましたでしょうか。

6月17日は父の日ですね。コミュニケーションセンターで毎月トップに入る人気商品を、日頃の感謝を込めて、父の日にプレゼントされてはいかがでしょうか。



御酒 4,200円(税込み)  
御酒ミニボトル 1,995円(税込み)



乾杯式アミノ酸 1,554円(税込み)

当店でもお父様にプレゼントをしたいというお客様が多くいらっしゃいます。この機会に家族と一緒に泡盛で乾杯！素敵な一日になりますように。

### ■UTCCスタッフオススメ商品

こんにちは！この春からUTCCに入りました大石です。

今回僕が紹介する商品は「本郷湯島絵図」です。この絵図は江戸末期ペリー来航頃の本郷・湯島周辺を描いたものです。地図中には赤門を有していた加賀藩をはじめ日本歴史好きにはなじみの深い武家屋敷が多く記されているほか、神田明神や湯島天神、水道橋や不忍池など今も残る名所や地名をあちこちに見る事ができます。これを手に百五十年前の街並みを思い描きながら散歩に興じるといったのも面白いかもしれませんね。ぜひ一度お店にいらしてご覧下さい！！



本郷湯島絵図 ¥1,000(税込み)

担当：UTCC三浦



東京大学コミュニケーションセンター  
The University of Tokyo  
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00  
電話：03-5841-1039  
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

Relay Column

## ワタシのオシゴト 第75回

Rings around the UT

工学系・情報理工学系等事務部学務課 係長  
秋本 真利さん

### 週末は日々の情報収集の結果がすべて出る



どこかの景品交換所のような窓口の中から

みなさま、はじめまして。工学系・情報理工学系等学務課総務・学生支援チーム(T)の秋本と申します。昨年4月から勤務しており今年で2年目になります。長～い部局名のとおり、工学部、工学系研究科、情報理工学系研究科は、16学科、23専攻、1専門職大学院で構成され、約6000名の学生が在籍しています。学務課では、所属学生の入・進学から卒業・修了までの修学上の支援を行っており、学生とじかに接する職場です。総務・学生支援チームは、学部総務Tと学生支援Tが合体してできたTで、主に、学務課と国際推進課に所属する職員の就労管理や課予算の管理、在学生、卒業生への各種証明書の発行、JASSO奨学金・その他奨学金業務、共通講義室の貸出・管理等を行っています。最初に、工学部に配属された時は、あまりに学科・専攻が多く、各学科・専攻の名前と事務室の場所を覚えることに苦労しました。どんだけ事務室があるのかと思いましたが、今では目をつむってでも行ける(冗談です)ほどずいずいと行けるようになり、何事も経験だと痛感する今日この頃です。あと、趣味といたしましては、読書と言いたいところですが、読書は読書でも毎日電車の中で新聞(金、土は夕刊もチェック)の、とある頁を読み、土日に向けての気を高めることです。なぜ、土日のなか、それは、ひ・み・つ。



職場の同僚と、どこかの景品交換所のような窓口前で

得意ワザ：健康増進のため、「半袖」信者(薄着の励行)を増やすべく日々実践すること。

自分の性格：かなりのお〇〇者です。

次回執筆者のご指名：猪又裕一さん

次回執筆者との関係：学務系の大先輩です。  
(別名、教職課程の鬼)

次回執筆者の紹介：会議では決して噛むことはありませんが、飲むと確実に噛みます。



# INFORMATION

## お知らせ

### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第547（5月2日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第547号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

伊藤たかね：英語の発音——「理屈」から入る言語学習に向けて

酒井邦嘉：進学の三原則

澤井哲：「秘められている」ということ

清水剛：「ゼンショー 東京大学・ベトナム国家大学ハノイ校 日本研究拠点プログラム」について

高橋哲哉：断ち切られた豊かな思索——北川東子さんを悼む

〈後期課程案内〉

古城佳子：教養学科

磯崎行雄：学際科学科～文理融合の新学科

石浦章一：統合自然科学科～既成の学問分野の枠を超えた学びを可能にする

〈本郷各学部案内〉

山口厚：法学部～法学部で学ぶ

宮園浩平：医学部～医学の魅力・医学部の魅力

光石衛：工学部～グローバル時代に求められる人

材とは？

熊野純彦：文学部～文学部という世界

——永遠を垣間見るために

国友直人：経済学部～“No Free Lunch”

経済学部への誘い

市川伸一：教育学部～教育学部への招待

相原博昭：理学部～科学で人を育てる理学部

古谷研：農学部～農学への招待

武田弘資：薬学部～創薬に向けてのチームプレー

丸山真人：〈本の棚〉桜井英治著『贈与の歴史学～儀礼と経済のあいだ』

高木俊輔：〈時に沿って〉駒場キャンパスの変化

関谷雄一：〈時に沿って〉変わらない現実と生活変化

〈理数系辞典案内〉

山本昌宏：数学

山口泰：情報

工藤和俊：身体運動

村田滋：化学

国場敦夫：物理学

松田良一・和田元：生物学、理科系共通

蜂巢泉：宇宙地球

ピアノ委員会：第11回選抜学生コンサート

オルガン委員会：第124回演奏会～森稔氏追悼感謝会

### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場博物館「トリニティ・カレッジ・ダブリン＝東京大学  
学術協定締結記念 W. B. イェイツとアイルランド」展

ウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats, 1865 - 1939）は、19世紀末から20世紀前半のアイルランドを代表する詩人・劇作家であり、1923年にはノーベル文学賞を受賞しています。イェイツの創作活動と生涯は、この時期のみならず、現代に至るアイルランド文化・社会のありようを考える上で、重要な示唆を与え続けています。

駒場博物館では、アイルランド国立図書館で開催され、高い評価を受けている「W. B. イェイツ——その生涯と業績」展をもとにしたパネル展示を中心に、同図書館および本学図書館の協力を得て、イェイツの文学者としての軌跡と同時代のアイルランド、そして日本での受容についての展示を行います。また、関連企画として日英語による詩の朗読とアイリッシュハーブの演奏、能『錦木』に影響を受けた一幕劇『骨の見る夢』の上演、本年度、本学と学術協定を締結したトリニティ・カレッジ・ダブリンのテレンス・ブラウン名誉教授による記念公演も行います。

詳細はホームページをご覧ください。  
 (http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html)

会場 駒場博物館 1階展示室 南側  
 会期 5月12日(土)～7月1日(日)  
 休館日 火曜日(ただし6月5日は記念講演会開催につき特別開館)  
 開館時間 10:00～18:00  
 入館料 無料  
 問合せ先 駒場博物館 03-5454-6139(内46139)  
 E-mail: komabamuseum@adm.c.u-tokyo.ac.jp



## お知らせ

### 情報基盤センター

### 各キャンパスで開催！ 専門分野のデータベース講習会実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方の基本をマスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、定期的に、「情報探索ガイダンス」各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

6月は、各専門分野のデータベースや文献管理ツールについて実習形式の講習を行います。

本郷のほか、駒場・柏・駒場IIキャンパス、また弥生地区(農学部)でも開催しますのでぜひご参加ください。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。

※学外からの利用方法はどのコースでも説明します。

**論文の探し方 ガイダンス in 本郷**  
 会場: 本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

- 6/8(金) 15:00-16:00** ProQuestで論文・新聞記事を検索するには? (電子ジャーナル、学位論文、新聞記事の探し方)
- 6/12(火) 10:30-11:30** RefWorksを使うには? in 駒場II (データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成)
- 6/12(火) 13:00-14:30** 人文社会科学系のためのWeb of Science + RefWorks (12,000誌以上を収録対象とした代表的学術雑誌論文データベース「Web of Science」)
- 6/12(火) 14:50-16:20** 自然科学系のためのWeb of Science + RefWorks (12,000誌以上を収録対象とした代表的学術雑誌論文データベース「Web of Science」)
- 6/19(火) 15:00-16:00** eolに企業情報を検索するには? (有償企業情報集・企業情報)
- 6/20(水) 15:00-16:00** Business Source Completeで経済学・経営学・国際ビジネス情報を検索するには?
- 6/21(木) 15:00-16:00** OECDの出版物や統計を探すには? OECD iLibrary
- 6/27(水) 14:50-16:20** 自然科学系のためのWeb of Science + RefWorks

申込先: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

### ■ 6/8 (金) 15:00～16:00 [会場: 本郷]

#### 【ProQuestで論文・新聞記事を検索するには?】

米国を中心とした電子ジャーナル・学位論文・新聞記事など多数の各分野の学術情報・データを提供しているデータベース「ProQuest」の利用方法を実習します。提供元から講師を招聘して行います。

### ■ 6/12 (火) 10:30～11:30 [会場: 駒場II (生研)]

#### 【RefWorksを使うには? in 駒場II】

データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成。文献管理ツールはそんな機能を持つ便利なツールです。

これから使ってみようという方向けに、Web版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。

代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

駒場IIでは初めての開催です。

### ■ 6/12 (火) 13:00～14:30 [会場: 駒場]

#### 【人文社会科学系のためのWeb of Science + RefWorks】

12,000誌以上を収録対象とした代表的学術雑誌論文データベース「Web of Science」の人文社会科学系の方向け利用方法と、検索した論文を文献管理ツール「RefWorks」に取り込む方法、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

### ■ 6/12 (火) 14:50～16:20 [会場: 駒場]

#### 【自然科学系のためのWeb of Science + RefWorks】

12,000誌以上を収録対象とした代表的学術雑誌論文データベース「Web of Science」の自然科学系の方向け利用方法と、検索した論文を文献管理ツール「RefWorks」に取り込む方法、参考文献リストの自動作成方法を実習します。



■ 6/13 (水) 15:00 ~ 16:15 [会場: 柏]

【はじめての論文の探し方】

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文 (CiNii Articles)、英語論文 (Web of Science) の基本的な探し方を実習します。

■ 6/14 (木) 14:50 ~ 16:20 [会場: 本郷]

【人文社会科学系のための Web of Science + RefWorks】

12,000 誌以上を収録対象とした代表的学術雑誌論文データベース「Web of Science」の人文社会科学系の方向け利用方法と、検索した論文を文献管理ツール「RefWorks」に取り込む方法、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

■ 6/14 (木) 14:50 ~ 16:30 [会場: 柏]

【SciFinder で化学分野の情報検索をするには?】

化学物質情報、科学技術文献情報、有機化学反応情報、特許文献などを検索できるデータベース「SciFinder」の利用方法を実習します。提供元から講師を招聘して行います。

■ 6/15 (金) 14:50 ~ 16:20 [会場: 本郷]

【SciFinder で化学分野の情報検索をするには?】

化学物質情報、科学技術文献情報、有機化学反応情報、特許文献などを検索できるデータベース「SciFinder」の利用方法を実習します。提供元から講師を招聘して行います。

■ 6/19 (火) 15:00 ~ 16:00 [会場: 本郷]

【eol で企業情報を検索するには?】

有価証券報告書・半期報告書など各種財務資料を全文検索・閲覧できるデータベース「eol」の使い方を実習します。企業研究にも活用できます。提供元から講師を招聘して行います。

■ 6/20 (水) 10:30 ~ 11:30 [会場: 駒場 II (生研)]

【EndNote Web を使うには? in 駒場 II】

データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成。文献管理ツールはそんな機能を持つ便利なツールです。

これから使ってみようという方向けに、Web 版の文献管理ツール「EndNote Web」の使い方を説明します。

代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

駒場 II では初めての開催です。

■ 6/20 (水) 15:00 ~ 16:00 [会場: 本郷]

【「Business Source Complete」で経済学・経営学・国際ビジネス情報を検索するには?】

経済学・経営学・ビジネス分野の学術雑誌論文をはじめ、市場調査や企業レポートなど経済学・経営学・国際

ビジネス研究分野の抄録・全文情報を提供しているデータベース「Business Source Complete」の利用方法を実習します。提供元から講師を招聘して行います。

■ 6/20 (水) 15:00 ~ 16:15 [会場: 柏]

【eol で企業情報を検索するには?】

有価証券報告書・半期報告書など各種財務資料を全文検索・閲覧できるデータベース「eol」の使い方を実習します。企業研究にも活用できます。提供元から講師を招聘して行います。

■ 6/21 (木) 15:00 ~ 16:00 [会場: 本郷]

【OECD の出版物や統計を探すには? OECD iLibrary】

OECD の出版物、統計情報等を全て収録したデータベース「OECD iLibrary」の利用方法を実習します。OECD 東京センターから講師を招聘して行います。

■ 6/22 (金) 15:00 ~ 16:15 [会場: 柏]

【はじめての Web of Science】

Web of Science は 12,000 誌以上の学術雑誌掲載論文を検索できる、代表的な雑誌論文データベースです。論文の引用情報も調べることができます。収録論文は全分野にわたるため、どの分野の方にもおすすめします。はじめての方向けにゆっくりと、Web of Science を使った英語論文の基本的な探し方を実習します。

■ 6/26 (火) 15:00 ~ 16:10 [会場: 農学部]

【はじめての論文の探し方 in 農学部】

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文 (CiNii Articles)、英語論文 (Web of Science) の基本的な探し方を実習します。

■ 6/27 (水) 14:50 ~ 16:20 [会場: 本郷]

【自然科学系のための Web of Science + RefWorks】

12,000 誌以上を収録対象とした代表的学術雑誌論文データベース「Web of Science」の自然科学系の方向け利用方法と、検索した論文を文献管理ツール「RefWorks」に取り込む方法、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

■ 6/28 (木) 15:00 ~ 16:15 [会場: 柏]

【RefWorks を使うには?】

データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成。文献管理ツールはそんな機能を持つ便利なツールです。

これから使ってみようという方向けに、Web 版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。

代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

●会場：

【本郷】総合図書館 1階 講習会コーナー 定員 17名

【駒場】駒場図書館 地下1階 会議室 定員 24名  
駒場図書館カウンター前に集合

【柏】柏図書館 1階 ラーニングサポートサービス  
定員 15名

【農学部】農学生命科学図書館 3階 PC 端末室  
定員 12名

※講習には ECCS アカウント必須のため、未取得の場合は6/18(月)までに取得手続きを行い、必ずアカウントを事前に取得しておいてください。

【駒場Ⅱ(生研)】生産技術研究所

6/12(火) Refworks を使うには? in 駒場Ⅱ  
As 棟 3階 中セミナー室 4 (As311・312) 定員 30名

6/20(水) EndNote Web を使うには? in 駒場Ⅱ  
An 棟 4階 中セミナー室 1 (An401・402) 定員 30名

※PC持込による実習形式[無線LAN利用]

生研所属者は生研の無線LANサービスが使用可能なので、事前に持参するPCのネットワーク接続申請、設定を行っておいてください。

その他学内者は、utroamでの接続になりますので、事前に utroam アカウントを取得のうえ持参するPCの設定を行っておいてください。

※PC持込ができない、または当日LAN設定が済んでいない場合は、講習会を聴講する形での参加となります。

●参加費：無料

●申込方法：

予約優先です。先着順ですので、お早めに各お申込み先までメールでお申込みください。席に余裕があれば、当日の参加もOKです。

■申込み先：(会場によって異なる)

【本郷】【駒場】【柏】

学術情報リテラシー係 (literacy \* lib.u-tokyo.ac.jp)

【農学部】

農学生命科学図書館 (service \* lib.a.u-tokyo.ac.jp)

【駒場Ⅱ】

生産技術研究所図書室 (toshu \* iis.u-tokyo.ac.jp)

各申込み先 (\*は@に置き換えて送信してください)に、以下のメールをお送りください。

メールのタイトル：6月ガイダンス参加希望 (参加日・コース名・会場)

本文：

(1) 参加日・コース名・会場 (2) 氏名 (3) 身分 (4) 所属 (5) 講師への質問 (6) 利用経験

【以下は該当の会場のみ】

[柏] (7) ECCS アカウントの有無

[農学部] (7) ECCS アカウントの有無

[駒場Ⅱ] (7) PC 持込の可否 (8) 利用する無線LAN

●共催：

【駒場】駒場図書館

【柏】柏図書館

【農学部】農学生命科学図書館

【駒場Ⅱ】生産技術研究所図書室・先端科学技術研究センター図書室

★授業・ゼミ・学生グループなどを対象にオーダーメイドで講習します！

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です(無料)。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでもOKです。

過去の実施例は以下のURLでご覧いただけます。  
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★Litetopi メールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

[literacy \\* lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy * lib.u-tokyo.ac.jp)

(\*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

(ツイッター [http://twitter.com/gacos\\_todai](http://twitter.com/gacos_todai))





## お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

### 第42回東京大学農学部公開セミナー

大学院農学生命科学研究科・農学部では、以下の要領でセミナーを開催します。無料で、どなたでも参加できます。多くの方のご来場をお待ちしております。

第42回 東京大学農学部公開セミナー  
『未来を創る農学、未来を支える農学』

プログラム：

「グローバルヒストリーとして見た現代アジア農業」

農学国際専攻 川島 博之 准教授

「独立栄養微生物による炭酸ガスの有機資源化」

応用生命工学専攻 石井 正治 准教授

「鳶が鷹を生む？エピジェネティクスによるDNAの軸」

応用動物科学専攻 塩田 邦郎 教授

司会：農学生命科学研究科広報室長 中山 裕之 教授

日時：6月16日（土）13：30～16：30

場所：弥生講堂・一条ホール

東京都文京区弥生1-1-1

地下鉄南北線「東大前」下車 徒歩1分

地下鉄千代田線「根津」下車 徒歩7分

対象：一般（どなたでも参加できます）

定員：300名（当日先着順、事前登録不要）

※定員を超えた場合、入場をお断りすることがあります。

参加費：無料

問合せ先：東京大学農学系総務課 総務チーム

総務・広報情報担当

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話 03-5841-8179 / 5484

mail koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

※ 受講証を発行いたします。

ご希望の方は、120円切手をご持参の上、  
当日受付でお申込ください。

主 催：大学院農学生命科学研究科・農学部

共 催：（財）農学会

## お知らせ

生物生産工学研究センター

### 微生物機能代謝工学部門（協和発酵キリン） 発足記念シンポジウム

生物生産工学研究センターでは、微生物機能代謝工学部門（協和発酵キリン）発足を記念し、下記の要領でシンポジウム「微生物代謝研究の新局面」を開催いたします。参加申込は不要です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：7月30日（月）13：30～17：30（予定）

場所：弥生講堂・一条ホール（講演）

弥生講堂アネックスセイホクギャラリー

（17：30より懇談会）

13：30 五十嵐 泰夫 センター長挨拶  
長澤 寛道 農学生命科学研究科長挨拶  
松田 譲 協和発酵キリン株式会社相談役挨拶

13：50 講演

[講演予定者]

五十嵐 泰夫（生物生産工学研究センター・農学生命科学研究科）

西山 真（生物生産工学研究センター）

小林 達彦（筑波大学）

吉田 稔（独立行政法人理化学研究所）

古園 さおり（生物生産工学研究センター）

小泉 聡司（協和発酵バイオ株式会社）

17：20 閉会の挨拶（未定）

17：30 懇談会

懇談会会費：2000円（予定、当日受付）

懇談会参加申込：辻田（tsujita@ofc.a.u-tokyo.ac.jp）

問い合わせ先：生物生産工学研究センター微生物機能代謝工学部門（協和発酵キリン）古園さおり

（uskos@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp）

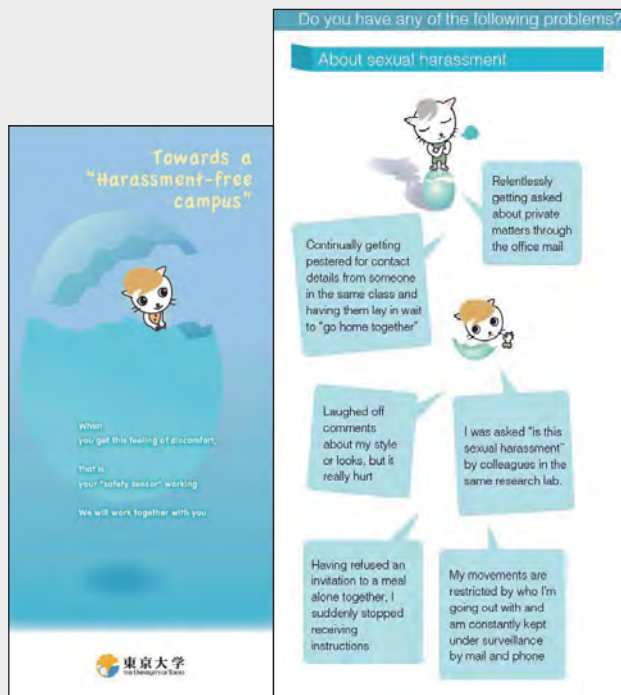
詳細については、生物生産工学研究センターホームページ（<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/biotec-res-ctr/>）上で随時お知らせいたします。

## お知らせ

ハラスメント相談所

英文リーフレットをリニューアルしました！

ハラスメントの具体的な例など、分かりやすく載せました。詳細は、ハラスメント相談所のホームページをご覧ください。



(左) 表紙、(右) リーフレットの内容

東京大学ハラスメント相談所

TEL : 03-5841-2233

E-mail : soudan@har.u-tokyo.ac.jp

HOME > 東京大学の活動 > キャンパスライフ > ハラスメント防止 > ハラスメント防止・啓発リーフレット等

This month's

# Todai Research

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>

東大の研究紹介サイト「Todai Research」の更新情報をお知らせします。興味のある記事はありましたか？ぜひ、サイトをご覧ください！

Todai Research で検索 🔍

## Feature Story

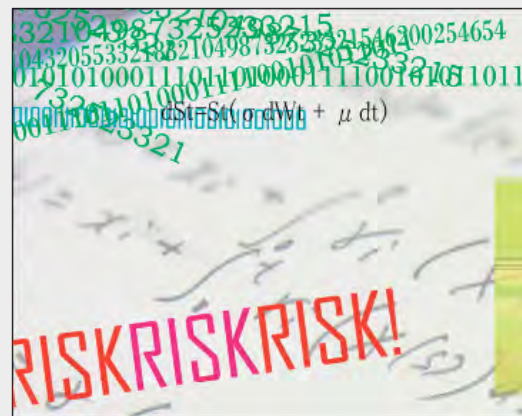
今月の特集記事

2012/03/23 数理科学研究科

### リスクヘッジを解く

金融市場を一変させた確率微分方程式

数学者伊藤清が世に送り出した確率微分方程式の応用の一つ、ブラック・ショールズの数理モデルは、金融商品のリスクヘッジを一変させた市場の姿を大きく変えました。そして今、数理科学研究所の楠岡成雄教授が挑むのは、高精度の近似を実現する最先端の数理ファイナンスです。



## Research Highlights

最新論文紹介

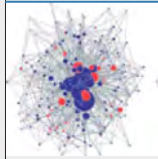
2012/05/01 農学生命科学研究科

栽培化の過程で捨てられてしまった植物の実力  
植物免疫メカニズム「レクチン抵抗性」の存在が明らかに



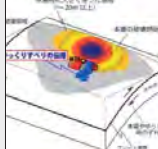
2012/04/19 生産技術研究所

ハブが壊れても機能が維持されるネットワーク  
つながりの少ない要素の重要な役割



2012/04/06 地震研究所

東北地方太平洋沖地震が起こるまで  
2度にわたる「ゆっくりすべり」の伝播



ご意見・お問い合わせはこちらまで

Mail : kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp Ext : 21045  
東大ポータル > 便利帳 > 総合企画部 > 広報課

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>



## 人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
24.4.15	大武 美保子	辞 職（千葉大学大学院工学研究科 准教授）	人工物工学研究センター准教授
（採 用）			
24.4.16	板津 木綿子	大学院総合文化研究科准教授	教養学部附属教養教育高度化機構特任准教授
24.4.16	Wijerathne Madgededara Lalith Lakshman	地震研究所附属巨大地震津波災害予測研究センター准教授	大学院工学系研究科特任助教
24.5.1	高柳 広	大学院医学系研究科教授	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
24.5.1	芳賀 猛	大学院農学生命科学研究科准教授	宮崎大学農学部准教授
24.5.1	Steele Jackie Frances	社会科学研究所准教授	
（昇 任）			
24.4.16	倉田 博史	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
24.4.16	立川 愛	医科学研究所附属先端医療研究センター准教授	医科学研究所附属先端医療研究センター助教
24.4.16	新野 俊樹	生産技術研究所教授	生産技術研究所准教授
24.5.1	楠原 洋之	大学院薬学系研究科教授	大学院薬学系研究科准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

### 学内広報 アンケートへのご協力をお願い

このたび、本学広報誌「学内広報」の教職員のみなさまの日頃の利用状況について、アンケートをさせていただくこととなりました。

下記の「学内広報アンケートWebサイト」にアクセスいただき、アンケートへのご協力をお願い致します。より良い冊子づくりのために、一人でも多くのみなさまにご意見をお聞かせいただけますよう、ご協力をお願い申し上げます。

学内広報アンケート Webサイト: <https://webform.adm.u-tokyo.ac.jp/Forms/Y20120516/>

実施期間: 5月23日(水)～6月12日(火)

問い合わせ先

本部広報課 広報企画チーム TEL:03-3811-3393 内線:82032 E-mail:kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# 卒業生室から教職員の皆さんへ

卒業生室では卒業生と大学とのネットワーク強化のためオンラインコミュニティ「TODAI for tomorrow」(TFT)を展開しています。

卒業生、教職員、学生で構成する「グレーター東大コミュニティ」促進のため、2012年4月より利用者範囲を拡大し、広く教職員の方々もご登録、利用いただけるようになりました。

また同時期に東大アラムナイの英語サイト、TFTの英語登録画面も新設し、外国人卒業生へのさらなるネットワーク強化に努めています。

※登録は[https://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/square/form.phtml?\\_type=teacher](https://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/square/form.phtml?_type=teacher)

※東大を卒業した教職員は<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/tft/>

【問合せ】卒業生室 :03-5841-1216 内線21216

## 対象者

- ・教員(在職/退職) 在職期間5年以上
- ・職員(在職/退職) 在職期間20年以上
- ・単位取得退学者
- ・中途退学者
- ・EMP修了者(Executive Management Program)

## サービス内容

### ホテル・イベント 優待

帝国ホテル東京の直営レストラン・バーラウンジ優待価格。講演会の優先先行予約など。

### メールマガジン

イベント情報、限定サービスなどお得な情報を随時掲載、月2回配信中。

### 赤門学友会報誌

同窓生インタビューや同窓会情報をラインナップした会報誌を無料でお届け。

### パーマナント アドレス

生涯利用できる東大オリジナルドメインのメールアドレスをサービス。



### 【卒業生向け英語サイト】

- ◆外国人卒業生に卒業生活動や大学の今の情報を発信

### 【外国人卒業生用TFT登録画面】

- ◆外国人同窓生の連絡先把握
- ◆居住地での同窓会活動に参加を促す

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

English 日本語

検索

すべての東大卒業生のためのサイト

## 東大アラムナイ

TODAI ALUMNAI

alumni/alumnai = 卒業生のこと。

### お知らせ

- ➡ 2012年の東大ホームカミングデーは10月20日(土)に開催いたします!
- ➡ TFT(TODAI for tomorrow)では大学のトピックスやイベントを掲載したメールマガジンを配信中。「入学時期の在り方」やその取り組み等は随時ご報告します。
- ➡ 東日本大震災への東京大学の対応については、こちらよりご覧いただけます。
- ➡ **【ご注意!】**  
「人事新報社」からの「東京大学同窓名鑑」の案内(往復はがき)は東京大学及び赤門学友会とは一切関係ありません。

#### TODAI for tomorrow

日本語

初めての方

登録済みの方

ユーザー名/パスワードをお忘れの方は [こちら](#)

English

New Registration

Registered members

Forgot your ID / Password?



# Contents

## 特集

- 02 東京大学の行動シナリオ FOREST2015 ～平成23年度までの総括と平成24年度以降の展望～  
08 冠研究機構の誕生 IPMUが4月よりKavli IPMUとなり前進！

## NEWS

### 一般ニュース

- 10 産学連携本部  
シンポジウム「中長期的な視点に立った多対多型産学官連携モデル」—大学等産学官連携自立化促進プログラム—  
11 産学連携本部  
東京大学産学連携協議会 平成23年度「第2回アドバイザリーボードミーティング」「年次総会」を開催  
12 本部資産課  
平成23年度ノートPCリユース事業の実績報告について  
13 本部人材育成課  
平成24年度新任教職員研修を開催  
14 バリアフリー支援室  
「平成24年度新規採用チームコーディネーター研修会」開催される

### 部局ニュース

- 15 先端科学技術研究センター  
木製3m風洞を特別公開  
16 大学院農学生命科学研究科・農学部  
緑地植物実験地 閉所式を開催  
17 先端科学技術研究センター  
石川県と再生可能エネルギー分野で協定を締結  
17 大学院工学系研究科・工学部  
テクノサイエンスカフェ『見て触れてナットク！旅客機の最新技術』の開催  
18 情報基盤センター  
スーパーコンピュータシステム柏拠点開所式を開催  
18 大学院経済学研究科・経済学部  
学生サポートルーム開設  
19 生産技術研究所  
先進モビリティ研究センター（ITSセンター）国際シンポジウム「International Symposium on ITS Research 2012 in Kuala Lumpur」開催される  
19 東洋文化研究所  
教職員等歓迎会を開催

### キャンパスニュース

- 21 本部入試課  
平成24年度入学者数決まる  
22 本部学務課  
平成24年度進学指導担当教員、決まる  
23 国際化推進学部入試担当室  
学部英語コース（PEAK）の合格者決定

## コラム

- 24 再生のアカデミズム<実践編> #03  
25 ひょうたん島通信 第5回  
26 決算のDOOR ～数字が語る東京大学 第20回

### ◆表紙写真◆

Kavli IPMU 恒例のティータイムの様子

- 26 インタープリターズバイブル vol.58  
27 Crossroad 産学連携本部だより vol.78  
28 Policy + alt vol.32  
29 ASIAN DIVERSITY No.19  
29 救援・復興支援室より No.12  
30 コミュニケーションセンターだより No.88  
30 Relay Column「ワタシのオシゴト」第75回

## INFORMATION

### お知らせ

- 31 大学院総合文化研究科・教養学部  
「教養学部報」第547（5月2日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——  
31 大学院総合文化研究科・教養学部  
駒場博物館「トリニティ・カレッジ・ダブリン＝東京大学 学術協定締結記念 W. B. イェイツとアイルランド」展  
32 情報基盤センター  
各キャンパスで開催！  
専門分野のデータベース講習会実施のお知らせ  
35 大学院農学生命科学研究科・農学部  
第42回東京大学農学部公開セミナー  
35 生物生産工学研究センター  
微生物機能代謝工学部門（協和発酵キリン）発足記念シンポジウム  
36 ハラスメント相談所  
英文リーフレットをリニューアルしました！

## 事務連絡

- 37 人事異動（教員）

## 巻末特集

- 38 卒業生室から教職員の皆さんへ

## 淡青評論

- 40 随筆のすすめ

## 編集後記

学内広報スタッフからのお願いです。前のページにも出ていますが、6月12日（火）まで、学内広報のアンケートを実施しています。学内広報はもう40年以上続いている歴史ある冊子ですが、編集していると、「で、これは読まれているの…？」とふと不安になってしまうことがあります。例えば、いつも配布先におまかせしていて、実際どんな方が読んで下さっているのかを、発行元の私たちが全然知らないのです。学内広報をよりよいものにしていくため、皆さまが普段学内広報を読んでいるのか、どのようにお手元に渡っているのか、どんな記事に関心があるのかなど、お聞きできればと考えております。普段から学内広報を読んでくださっている方も、今日たまたまこの欄を見たという方も、数分で終わるものですので、是非ご協力ください！またその他ご意見・ご要望などありましたら、ぜひ本部広報課までお寄せください。（ふ）



七徳堂鬼瓦

## 随筆のすすめ

私は本を読むのが好きだ。刑事もの、歴史小説、児童文学、SF、評論、なんでもありだ。電車の中はもちろん、御茶ノ水駅から大学まで、研究室から生協に歩いてゆくときも読んでいる。夜帰る時は街灯やコンビニの灯りを拾い歩きしながら読む。雨にも負けず、風にも負けず。持ち歩く本が一冊で済めばよいが、読み終わりかけているときには新しい本をもう一冊鞆に入れる必要がある。それが面白くなかった時に備えてもう一冊。選んだ本がつまらなかったときの

ダメージは極めて大きい。自身の判断力のなさを思い知らされ、一日中仕事にもならず人と言葉を交わす気力もおこらない。電車が混んでいた時のために文庫本も必須だ。結構重い。歩きながら本を読む姿を頻繁に目撃されていたことから、こちらにも書くようにと仰せつかった次第ではあるが、読むのが好きだからといって書くのがうまいわけでは決してない。書く立場になってみた場合、文章とは恐ろしいものだ。知識、思考力、表現力だけでなく、浅薄な人格、自己顕示欲、うけないジョークなど自身のあらゆる負の部分が白日の下にさらされてしまう。まさに羞恥プレイだ。皆さんは常日頃、論文、報告書、申請書などは書きなれているだろう。ただしここで問われるのは論理の構成に過ぎない。では随筆を書いてみたらどうだろうか。随筆というと大層な感じがするが、要するに作文のことだ。小学生のころは作文と呼ばれていたものがいつの間にもやら小論文と呼ばれるようになり、論理と客観性が重視されることで個人的な背景を消し去る文章の書き方が身についてしまう。四〇歳を過ぎてあらためて作文を書いてみたならば、これまでの人生で培ってきた素養、言葉に対する感覚の鋭さ、自身の内面と向き合う姿勢の真摯さと軽みのバランスなど、さまざまな個性と特質があらわれてくるに違いない。恥ずかしい。でもそこで全然恥ずかしくないと思うのであれば、それはそれでどこか問題があるようにも思う。

坂井 克之 (大学院医学系研究科・医学部)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

### [訂正]

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部署および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1424 (2012.4.23)

11 ページ：卒業生総代 氏名

(誤) 教養学部 川下 俊文

(正) 教育学部 小原 亮

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1425 2012年5月25日

東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

<http://www.u-tokyo.ac.jp/>